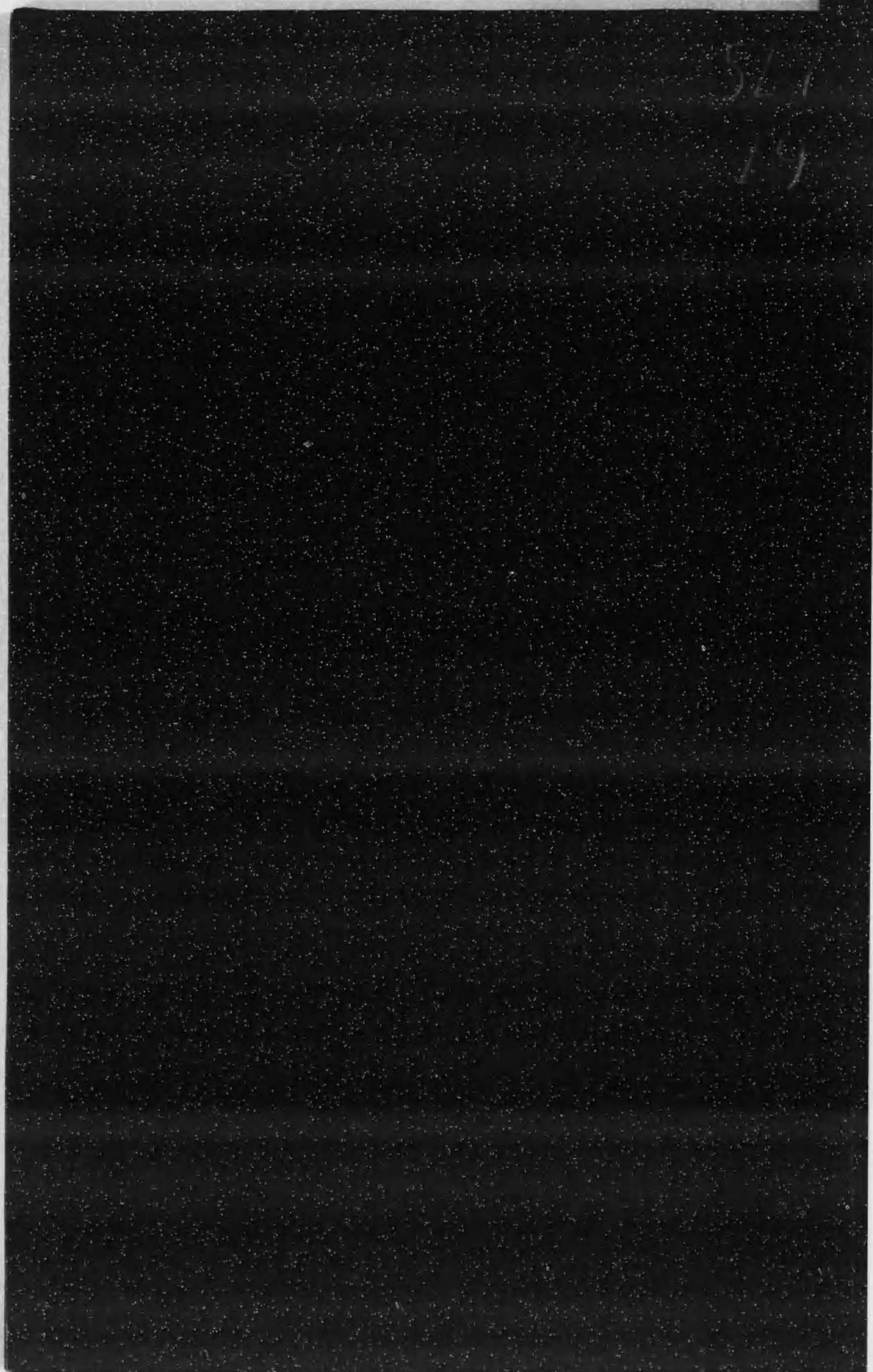


始



521  
19

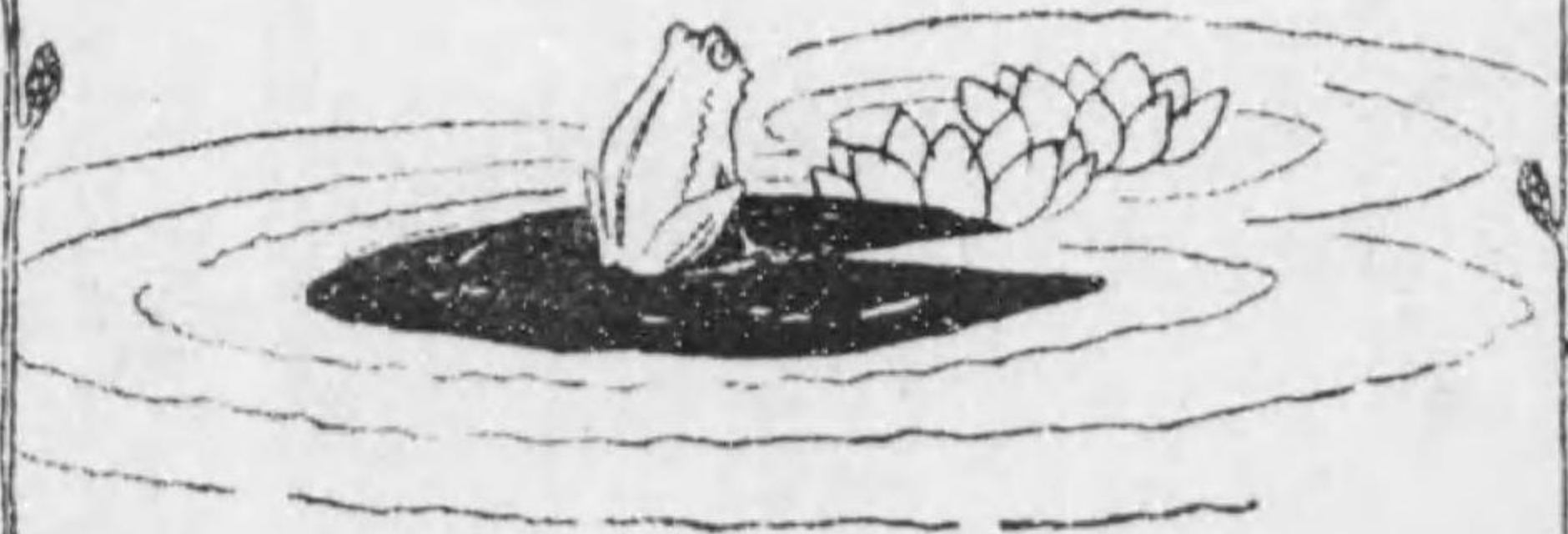
30 4.20

(1) 世傳說物語

# 蛙の子

著 田 八 十 八

繪 名 四 郎

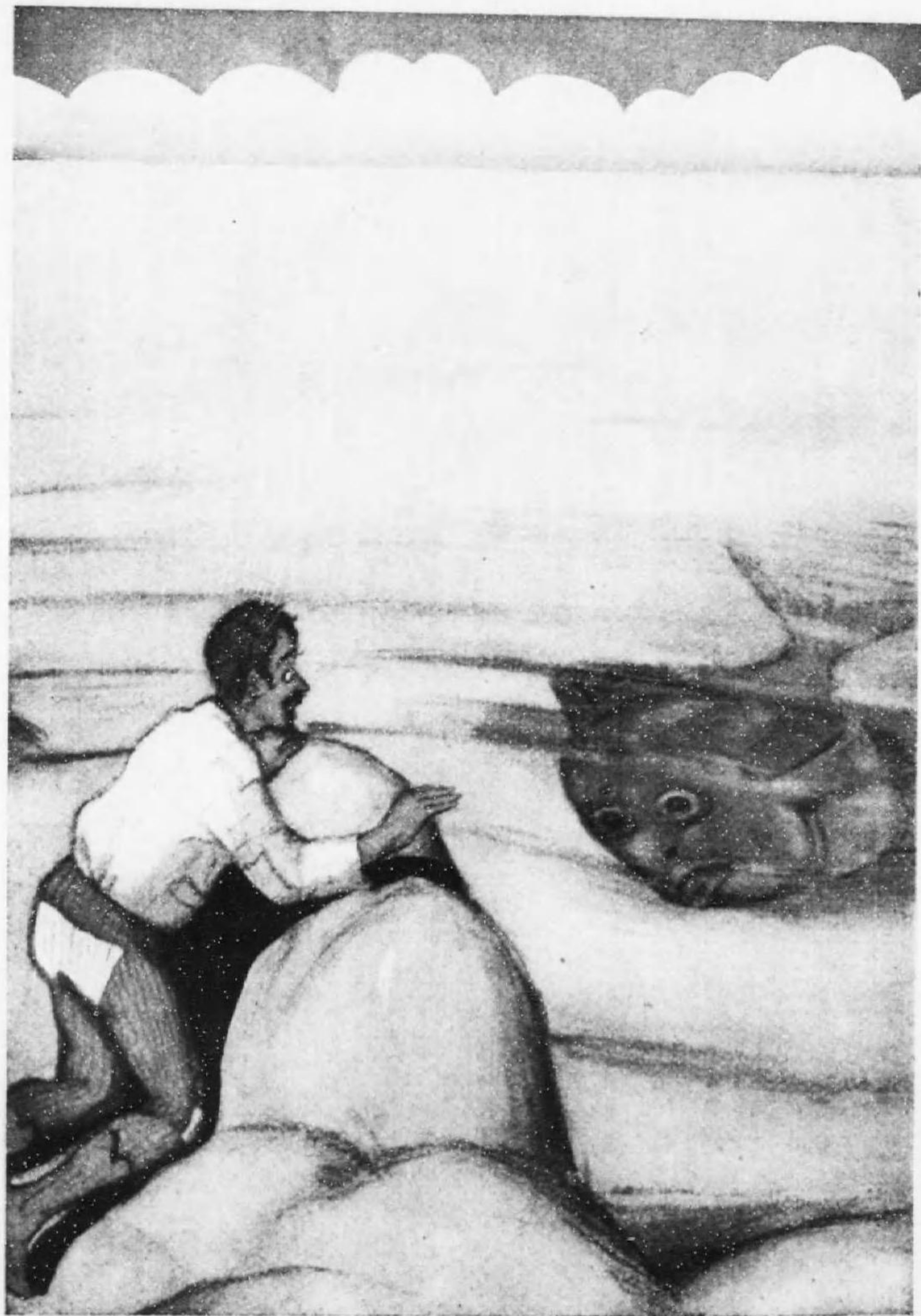


了 米 口 書 院 發 行

大 正

13. 6. 28

交 内



漁夫の婦

## はし が き

『蛙の王子』には獨逸の傳説や口碑をあつめました。

おなじ傳説や口碑のなかにも、みなさんがお読みになつて、さつぱりわからないものや、ちつとも面白くないものがあります。わたしは、一番面白さうなお話ばかりをどんなちひさい人たちにも判るやう、やさしく書きなほして、この御本をつくつたのです。

獨逸にはグリムといふ、名高いお伽のおぢさんがあつて、傳説や口碑を澤山面白なお話にして下さいました。わたしは、その中からも『蛙の王子』や『いさましい仕立屋』などを譯しました。グリムの童話は、みなさんもお読みになつたことがあるかも知れません。この御本の中で、みなさんがお読みになつたものがあれば、それはきつさグリム小父さんのお話です。

「世界傳説物語」について

ごこの國にも、それぞれ、その國だけの傳説や口碑があります。この傳説や口碑は、誰が讀んでも面白く、また、それらの國の人情風俗を教へられるところの多いものです。

ですから、傳説や口碑は、大人の讀み物として適當なばかりでなく、児童文學の材料として、最も貴重なものだと存じます。

そこで私は、獨逸、佛蘭西、露西亞、伊太利等、あらゆる國の傳説をあつめて、これらのものの中から、誰にもわかりよく、面白いものを選び、やさしい童話に書きなほして、この「世界傳説物語」をつくることにしたのです。私は、これこそ、ごなたにもお奨めすることの出来る讀みものだと信じてをります。

大正十三年六月

田島八十八

蛙かへるの王子わうじ——目次——

シルダ人 <small>じん</small> の話 <small>はなし</small> .....	(一)
(一) 山 <small>やま</small> から材木 <small>ざいもく</small> を下 <small>くだ</small> した話 <small>はなし</small> .....	(二)
(二) 日光 <small>にっくわう</small> を拾 <small>ひろ</small> ふ話 <small>はなし</small> .....	(六)
(三) 足 <small>あし</small> をさりちがへた話 <small>はなし</small> .....	(一二)
(四) 石垣 <small>いしがき</small> の草 <small>くさ</small> .....	(一七)
(五) 鐘 <small>かね</small> を洗 <small>し</small> めた話 <small>はなし</small> .....	(二二)
蛙 <small>かへる</small> の王子 <small>わうじ</small> .....	(二九)
(一) 王女 <small>わうぢよ</small> の約束 <small>やくそく</small> .....	(三〇)
(二) たづねて来た蛙 <small>かへる</small> .....	(三六)

(三)	はぢけた鐵帶	(四三)
	漁夫の夫婦	(四七)
(一)	赤いひらめ	(四八)
(二)	第一の望み	(五三)
(三)	第二の望み	(五七)
(四)	第三の望み	(六三)
(五)	第四の望み	(六八)
	いさましい仕立屋	(七五)
(一)	蠅征伐	(七六)
(二)	力くらべ	(八一)
(三)	洞穴の中	(八八)

(四)	仲間喧嘩	(九一)
(五)	王様の難題	(九九)
	片すみのお祖父さん	(一〇三)
	あをい火	(一〇九)
(一)	古井戸のなか	(一一〇)
(二)	小人のたすけ	(一一四)
(三)	王女のゆめ	(一一九)
(四)	王女と國	(一二六)
	ふしぎな木の話	(一三三)
(一)	森のなか	(一三四)
(二)	黄金の鍵	(一三六)
(三)	黄金の指輪	(一四〇)



(四) 魔法の力	(一四五)
なんでも博士	(一四九)
(一) いろは本と洋服	(一五〇)
(二) 器のなかの蟹	(一五三)
(三) 金のありば	(一五九)
一寸法師	(一六五)
(一) 一寸法師の智慧	(一六六)
(二) 旅のぼじまり	(一七一)
(三) 二人の盗人	(一七六)
(四) 牛と狼のお腹	(一八二)
金貨の雨	(一九三)
(一) ひとりばつち	(一九四)

(二) 最後の着もの	(一九五)
(三) 黄金いろの雨	(一九九)
チブリアヌスの鏡	(二〇一)
(一) 醫者のお禮	(二〇二)
(二) 新らしいお母様	(二〇九)
(三) 伯爵の死	(二一五)
(四) 武器室の出来ごと	(二二二)

目次終



大  
正  
徳  
堂  
の  
話



(一) 山から材木を下した話

ドイツのある山奥に、小さな村がありました。けれども村の人たちは、自分たちの住んでゐるところを「村」と言はれるのが嫌ひで、「村ぢやない、國だ。」

といばつてをりました。そして村長さんのやうな人のことを王様と呼んでをりました。村の人たちは、どんなことがあつても山から外へは出ないのでした、ですからいつになつても昔のやうに開けなかつたのです、電燈もなければ、汽車も自動車もありません、言葉も都とは大へんちがつてをりました。

ドイツの人たちは、その村の人たちをシルダ人と言つて、開けない



ところだとあざけつてゐたのです。

ある時、大せいのシルダ人が集つて相談をはじめました、それは村の真中へ議事堂を建てようといふのです。

「開けた國には、どこだつてみんな議事堂があつて、そこで集會をするといふ話だ。だから私たちも、こんなところに集つて相談するのはいけない。」

ど、一人がをかした言葉で言ひました。でも笑ふ者はありません、それはみんな同じ言葉で話をする村の人ばかりですから。

「さうだ、さうだ。議事堂がなくてはこの國の名譽にきづがつくぞ。」かう言つて、すぐに賛成したのは、村中でいちばん惻怍者のハンケといふ老人でした。いつも、ハンケの言ふことに反對する者はないの



で、この日の相談はすぐにまとまつたのでありました。

議事堂を作るには、まづ材木がなければはじまりません。大せいの村人は材木を伐りに高い高い山へ登りました。そしてなるべく丈夫さうな木を伐つて、きれいに枝をはらつて、麓まで運びおろすことになりました。何しろ材木は太くて重いのですから、一本かつぎ下すのにも、五人も十人もしてかゝらなければなりませんでした。そこで日暮れまで働いた村人は、すつかり疲れてしまひました。

「あゝ、あゝ、もう身體が痛くなつてしまつた。」

一人の村人はかう言ひながら、側にあつた材木を力まかせに蹴飛ばすと、これはまあどうしたことでせう。材木はひとりでにごろごろころがつて、どんどん麓へ落ちてしまつたのです。



これを見てゐた惻怍者のハンケは、思はず膝を叩いて、

「やあ、これは面白いぞ、私はいいことを思ひついた。」

と言ひました。

「何だ、何を考へたのだ。」

とみんながきゝました。するとハンケは得意さうに胸をつき出して「諸君。材木はひとりで麓へ落ちて行くではないか。われわれはつまらない骨折りをしてゐたのだ。これからあの材木をこゝへ運んで来て、いまの材木のやうにひとりで落さうぢやないか。」

と言ひました。

大せいの村人は、なるほどと思つて、すぐに一度麓へ運んだ材木を山の上まで擔ぎ上げたのでありました。それがすんだ時、ハンケはみ



んなに向つて、

「さあ、つき落せ。」

と號令をかけました。みんなは疲れたのも忘れて、力いっぱい材木をつき落しましたから、材木はごろんごろんところがつて、たちまち麓へついてしまひました。

そこで、ハンケはまた得意さうに

「どうだ、諸君。こんどはすゝぶん樂をしたね。」

と言ひました。

### (二) 日光を拾ふ話

さて、シルダ人の村では、いゝえ國では、いよいよ議事堂を建てる

ことになりました。けれども大工も左官もあなないところですから、何をするにも村中の人が總掛りで働くのでありました。

みんなに、いろいろ指圖するのは、惻怍者のハンケでした。ハンケは赤い鼻の頭に湯氣を立て、朝から晩まで世話をやいてをりました。が、そのおかげで間もなく立派な議事堂が、村の真中に出来上りました。

「立派なものだ、お城よりも立派に見えるぢやないか。」

と言つて、ハンケは大へん得意になりました。村人たちも、一生懸命に働いたのですから、みんな大喜びをいたしました。

議事堂のでき上つた翌日、村人に最初の集會がありました。村人は喜び勇んで議事堂へ入つて行きました、ところが一番先に立つてゐた





人が

「やつ。暗いぞ。真くらだぞ。」

と大きな聲で叫びました。

「なるほど。こりや暗い、鼻の先も見えないぞ。化物が出やしないかな。」

どその次の人が言ひました。

大せいの村人も、これにはびつくりしてしまひました。議事堂には窓がなかつたのです、作るのを忘れてゐたのでした。

「これはいけない。」

と、ハンケもすつかり弱つて考へ込んでをりました。何を思ひ出したのか、急に自分の家へ歸つて行きました。そして飛ぶやうに急い



で戻つて來た時には、もうにこにこして、

「諸君。いいことがあるよ。蠟燭を立てよう。」

と言ひました。

ハンケは蠟燭に火をつけて、自分の頭の上へ立てました、それで、蠟燭の光りが遠くまでとゞいで、みんなの顔がやうやくわかるやうになつたのでした。しかし蠟燭はたくさんなかつたので、すぐにあしまひになつてしまひました。

村人たちは議事堂の外へ出て、

「どうすれば明るくなるだらう。」

と相談をはじめたのでした。

「あゝ、いいことがある。日光があれば明るくなるのだ、だから議事



堂の中へ日光を入れようぢやないか。」

とハンケが言ひました。

「日光を入れるのにはどうすればいいのだ。」

「わけはない。みんなで日光を拾つて来て入れればいいだらう。」

「なるほど。それがいい、それがいい。」

大せいはかう言つて手を拍いて喜んだのであります。

その翌日のことです。朝早く、まだ太陽が出ないうちから、村の人はみんな、議事堂の前へ集つて来ました。バケツを持った人もあります、袋をもつた人もあります、桶を抱へてゐる者もあります。

大せいは、太陽の出るのを、いまかいまかと待つてをりますと、東の空から雲を破つて、美しい太陽がのつと昇りました。



「さあ日が出たぞ。」

「なるべく新しい日光を拾へ。」

みんなはかう言つて騒ぎだしたのです。そしてシャベルや椀などで太陽の光をすくつては、バケツだの桶だの、中へ入れはじめました。

「ちつとも重くないね。」

「あゝ、日光は軽いんだよ、重かつたら私たちは押し潰されるぢやないか。」

こんな話をしながら、みんなは一生懸命に働くのでした。この時ハンケはにこにこして言ひました。

「こんなつまらないことでも、やつてみるとなかなかむづかしいね。」  
一體、日光はバケツの中へ拾へこめるものでせうか、みなさん！



(三) 足をとりちがへた話

晴れた美しい日でした。

たくさんのシルダ人は野遊に出かけました。お日様の暖い光を浴びながら、シルダ人はその広い野原で、歌を唱つたり、躍り廻つたりしました。そしてお日様が西に沈みかける頃には、みんな疲れて野原に寝ころんでしまひました。

「私は、ずいぶんくたびれちやつた。この自分の足がちがつてゐるやうな気がする。」

と目のさめた時一人がいひました。

「ほんただ。私もそんな気がする。」



「いつたい。私にくつついてゐる足は自分のものだらうか。」

「さあ、どうだらう。どうもさういふやうには思へない。」

そのんきな男が花をつみながら答へました。

「それちやあ立つて歩いて御覧よ、歩るけたなら自分の足だ。」

「私はもうくたびれて歩けやしないよ。」

とそんな話をしてゐました。そのうちにこの話が、だんだんと外の人達にもひろがつて、自分の足がほんとに自分のものかどうかについて大騒ぎを起しました。

「みんなしてただ騒いでゐたつてわかりつこはないよ。なんとかためしてゐることは出来ないかねえ。」

「うん、それがいゝ、それがいゝ。なんとかしてためしてみやう。」





その時、向ふの山を越して、一人の旅人が来るのを見つけました。旅人は、もう日も暮れかゝつて来たので大急ぎで、町の方へ歩いて行きました。

シルダ人は、やつぱり寝ころんだまゝ、大声で旅人を呼びました。

「何か御用ですか。」

と旅人はシルダ人の側へやつてきました。そして、みんなが、ごろごろ寝ころんでゐるのを不思議さうに眺めてみました。

「そんなに、なにを眺めてゐるんです。私達はいま自分の足が、ほんとに自分のものかどうかで大騒ぎをしてゐるところです。何とか、あなたに、ためして頂けないでせうか。」

とシルダ人は旅人にいひました。



「さあ、どうしたらいいだらう。」

と旅人はあきれて返事にこまりました。

「だから、それをあなたにお願してゐるんです。」

どのんきなシルダ人はげらげら笑ひながらいひました。

旅人はしばらく考へてゐましたが、

「ちやあ、かうしたらいいだらう。私が、この杖で君たちの足を力まかせに叩くから、もし叩かれて痛かつたら自分の足がほんとだといふことにしやう。」

と旅人はいひました。

シルダ人は、それがいい、それがいいとみな賛成しました。そこで旅人は杖をふりあげてシルダ人の足を叩くことになつたのです。



「いゝかい、痛かつたら、自分の足なんだよ、みんな一列に寝ころんでおくれ。さうして叩きいゝやうに足をあげてくれ。」

と旅人はおかしさをこらえていひました。

シルダ人は、ほんとに自分の足かどうかをためしてもらへると思つたので、みんな嬉しさうにはゝえみしました。

旅人は杖をふりあげて力いづばいになぐりつけました。

「あゝ、痛い。」

とシルダ人は飛びあがつて叫びました。誰も叩かれて痛くないものはありませんでした。そしてみんな痛い足をさすりながら

「これが、ほんとに自分の足でよかつた。」

と旅人にお禮をいひました。



#### (四) 石垣の草

春になるとシルダの國のお城の石垣には、青い草がいつばい生えて來ました。

ある日のこと、王様はそれを見て、

「どうも、草がこんなに生えては仕方がない。誰かこの草を刈つてしまへ。」

と命じられました。

けれども、お城の石垣は、高くて高くて、とても普通の人にはとゞきません。村の人たちは、どうしたものかと、いろいろ相談してゐましたが、なかなかいゝ智恵が浮ばないのです。



すると、これをきいた一人の男が、

「よし、それちや、私がすつかり刈つてやらう。そして澤山御褒美を貰ふことにしよう。」

といふので、ある日、弓と矢を持つて石垣の前へまゐりました。

そして、一本一本、草をめがけて矢を射はじめました。けれども矢はなかなか當りません。一日かゝつても、百本の草も射切ることができないのでした。それでも、飽きずに、せつせと草を射てゐますと、そこへ惻怍者のハンケが通りかゝりました。

「おい、何をしてゐるのだ。」

とハンケは聞きました。

「やあ、惻怍者のハンケさんか、この弓でお城の草を、みんな射切ら

うと思ふんだ。さうすりや王様から御褒美がさがるよ。」

と男は得意になつて答へました

「うはゝゝゝ。なんといふお前は馬鹿ものだ。そんな無駄なことをしないで私の所へ智慧を貸りに来ればいゝのに。あんな草は馬に喰はしてしまへばいゝのだ。」

とハンケは賢さうにいひました。

「そうだなあ、それには氣がつかなかつた。やつぱり惻怍者のハンケさんだけあつて、いゝ智慧をもつてゐる。」

その男は大層感心してしまひました。

そこで次の朝、その男は一匹の大きな馬を引ゐて来て、

「さあ、これで石垣の草を残らず喰はしてしまふことが出来る。」





といつて嬉びました。馬は下の方から、だんだんに草を食ひはじめましたけれど、石垣は馬のせいよりもずつとまだ高いのですから、石垣の上の方の草まで食はせることは出来ません。

「これはハンケの奴にだまされたかな。あいつも思つたより馬鹿ものだ。」

と男は思ひました。その時、ハンケがまたそこへ来ましたので、

「おい、ハンケさん。お前さんも駄目だね。馬にはてつぺんの草は食べられないよ。」

と男は、怒つていひました。

「それはあたりまへさ。そんなことをしたつて、この草が無くなるものか。」



「では、どうすればいゝのかね。」

「馬をつるして食はせるのさ、石垣の上から馬を引き上げて食せはるんだ。」

「成程、それには氣がつかなくつた。やつぱり惻怍者のハンケさんだけある、早速始めやう。」

と男は石垣に登つてゆきました。大勢のシルダ人は珍らしさうに、下からそれを眺めてゐました。

「さすがは惻怍者のハンケさんだ。うまいことを考へる。」  
と人達はみな感心しました。

男はハンケと一緒にえつこら、えつこら、馬の首の綱をひつぱりはじめました。馬はだんだん持上げられました。さうして、あんまり苦



しいので大きな口を開けて、赤い舌をべろべろと出しました。すると下で見えてゐた人達は一しよに、

「馬が草を食つた。食つた。ハンケさんの智慧には驚いた。」

と大声で叫びました。ハンケと男は、それを聞くと馬の綱を一度に放ちました。すると馬はごたんと下に落ちて死んでしまひました。

### (五) 鐘を沈めた話

ある時、シルダ人の國と、他の國とが、大戦争をやつたことがありました。始めはシルダ人の國が勝つて、どんどんと敵の國に攻め込んでゆきました。そして、金や銀や寶石などをたくさん分捕つて來ました。勝ち戦の報せは毎日のやうに、シルダの村長のところへときま



た。そして、もうあと敵の都を攻め落せば味方の大勝利になることがわかりました。

ある日、村長は、村のものにいひました。

「こんどの戦で敵を破れば、このシルダの國は、どんなに強くなるか——私はそれを考へると胸が躍るやうだ。だが、もし負けて御覽、このシルダの國はめちやめちやな目に逢はなければならぬ。そしてあのお寺の大切な鐘も、名高い金剛石も、金の冠も、みんな敵の國に持つて行かれてしまふのだ。」

「わかりました。御心配なさいませぬ。シルダの國の人々は勇ましく戦つてゐます。いまに勝ち戦の知らせを持つて使ひが來るでせう。」

と村のものは平氣な顔で答へました。



次の日、お城の人達が眠つてゐるうちに、馬の走る音が聞えて來ました。そしてお城の門をどんどんと叩きながら、

「門を開けて下さい。」

大變なことになつたのです。

昨日の戦は味方の負です。いまどんどん敵が攻めて來ますから戦争の準備をして下さい。」

ど大聲で、門番を起すものがありました。門番が眠むい眼をこすりながら、その堅い大きな門をぎいつと開きますと、そこには血で眞赤になつた使のものが倒れてゐたのです。

さあ、シルダ人の國では大騒ぎが始まりました、まづ國の寶の金剛石や、金の冠は、七重の箱をこしらへて洞穴の中へ隠してしまひまし



た。けれども、あのお寺の鐘だけはどうすることも出來ません。そこで賢い人たちがあつまつて、その相談を始めました。

「あの鐘は、この國が創められた時造つたもので、シルダの國の一番大切な寶だ。どうかして敵に奪れない工夫はないものかなあ。」

ど村長は悲しさにいひました。

「なに、さうさもないことでございます。鐘を湖に沈めて印をつけておけばいゝではありませんか。」

ど白い髪のお爺さんが、いゝことを思ひついたやうな顔をして答へました。外の人達は、

「さうだ。それが一番いゝやりかただ。敵の攻めて來ない間に早く湖に沈めてしまへ。」



と大急ぎで、お寺にかけつけて、その鐘をわつしよ、わつしよ、とかつぎ出しました。そして、さつそく船に乗せて、ごんごんと湖の中へ、こいでゆきました。

「こゝらへ沈めやうぢやあないか。この湖底なら、敵の國の人にだつてわかるはずがないよ。」

さひながら、その大切な鐘を水の中へ投げ込んでしまひました。そして船の人々は手をたゝいて喜びながら、これでいゝ、これで大丈夫だ、と口々に叫びました。

「けれども、こゝへ印をしておかなければ探す時こまりますよ。」とある男が訊ねました。

「そんなことは何でもないぢやあないか、船に印を書いておけばいゝ

んだ。」

と白い髪の老人が答へました。そして、船に、印をつけて歸つて來たのでした。

戦争はシルダの國が負けないうちに仲直りになりました。ですからシルダの國では洞穴に隠した寶物を掘り出したり、湖に沈めた鐘を引きあげたりすることになりました。

鐘を引きあげるために印のついた船が、沖に向つてこぎ出されまし。けれども、ごに鐘を沈めたかさつぱりわかりませんでした。

「印は船につけてあるのだ。船を見ろ、印を見ろ。」

と老人は白い髪を、ふるはせながら、叫びました。けれども船は波に動かされるばかりで鐘を沈めた場所はたうとう判りませんでした。

蛙  
の  
王  
子





## (一) 王女の約束

すつと大むかしのこと、あるところに王さまが住んでをりました。王さまには幾たりかの、やさしい王女がりましたが、とりわけて一ばん末の王女は、それはく美しい方でした。王さまのお城ちかくに、こんもりとしげつた暗い森がありました。その森のおくの菩提樹の木かげに一つの泉があつて、いつも透きとほつた水晶のやうな水をたゝえておました。あつい夏の日になると、末の王女は毎日のやうに、すゞしい泉のふちに参りました。そしてあをあをとしげつた草のうへに坐つて、さらさらわきあがる泉の水をながめたり、うつくしい聲で歌をうたつたり



するのです。それにも倦くと今度は、もつて来た黄金の毬をとりだして宙になげました。なげでは受け、うけては抛りして、王女はひとり楽しくあそぶのでありました。

ある日のこと、王女はやつぱり黄金の毬をなげて遊んでをりました。そのうちに、ふと毬をうけそこなつて下におとしてしまひました。毬はころころと草のうへをころがると、おやと言ふ間に泉のなかに落ちて、すつと沈んでいつてしまひました。

王女は泉のふちに駈けよつて、ちつと水の面をみつめましたけれどそれは深いく泉ですから、とても底までは分りません。王女はしくしくと泣きだしました。もう悲しくて悲しくてならないやうに、王女の泣きこゑはだんく高くなつて行きました。すると誰か、



「おや。王女さま。どうかなさつたのですか？ そんなにお泣きになると、石まで悲しくなつて、泣きだしてしまひますよ。」

と申しました。その聲に王女はまだ涙ぐみながら、邊りを見まはしましたけれど、それらしい人かげもありません。そのとき泉のなかに音がしましたので、よく見ると、一びきの汚いぶくぶくとした蛙が、水のなかから顔をだして見あげてをりました。

「あゝ、蛙さんなの、いまものを言つたのは？」

と訊きながら、王女は、

「だつて、わたし、黄金の毬を泉のなかにおとしてしまつたんですもの。」

どうつたへました。すると蛙は、

「はははは。ちやもう泣くのはおやめなさい。僕がいゝやうにしてあげますからね。しかし、僕が黄金の毬をとつて來たら、あなたはどんな御褒美をくれるのです？」

と言つて聞きました。

「なんでも、おまへの欲しいものを上げてよ。眞珠でも、寶石でも、それからこの黄金の頭飾りでも。わたしの持つてゐるものなら何でもあげるわ。」

さう王女がこたへますと、蛙はかへつて頭をふりながら、

「いいえ。着ものや寶石や黄金の頭かざりや——僕はそんなものならちつとも欲しかありません。」  
と言ふのでした。



「たゞ王女さま。あなたが僕をお好きになつて、お友だちになつてくださればよいのです。そして一しよに食卓にむかつたり、おなじ黄金のお皿で食べたたり、一しよのお杯で飲んだり、それからおなじ寢床で寝たりしてくださいね。さうしたら僕はすぐ泉のそこへもぐつていつて、きつと黄金の毬をとつてきてあげませう。」

「ええ、いいわ。蛙さんがほんとに毬をとつてきてくれるんなら、わたしはどんなことでもお約束するわ。」

王女はすぐに承知しました。けれどもその時、王女はおなかの中で、かう思つたのでありました。

「なんて莫迦をいふ蛙でせう。蛙なんか水のなかに、蛙同志でくらしてゐればいいのだわ。どうして人間のお友だちなどに、なれるものぢ



やない。」

でも蛙には、それは分りません。蛙はすぐ頭を水のなかにつつこむと、ぶくぶくと洗んでゆきました。そして、ちきに黄金の毬を口にはえながら、うきあがつて泉のそとへ出てまわりました。黄金の毬はころころと、みどりの草のうへにころがりましました。

王女はにこにことして、うつくしい黄金の毬をとりあげると、そのまゝ蛙にはお禮一つ言はないで、ごんごんと驅けだしてしまひました。

「あつ。王女さま。」

蛙はあわてて二足三足、びよん／＼と跳びだしながら聲をあげました。

「待つてください、待つてください。僕は、そんなに速くは走れない



のですよ。」

蛙がいくら聲をしばつて叫んでも駄目でした。王女はもう振りむきもしないで、ずんずん走つて、行つてしまつたのです。蛙はその時はしかたなしに、また泉のなかへもどつて行きました。

王女はどんどん走つて、お父さまのお城へかへつてくると、それなり蛙のことなんか、すつかり忘れさつてしまひました。

(二) たづねて来た蛙

そのつぎの日のことでした。

丁度王女がお父さまの王さまをはじめ、みんなと一しよに晩の御飯をたべてをりますと、バタ、バタ、バタ、バタといふへんな音が聞え



ました。その音はだんだん近くなつて大理石の階段をのぼつてくるやうでしたが、やがて、室の戸口のまへで止まつたかと思ふと、コッコツ戸をたゝきながら、

「王女さま。一ばん末の王女さま。僕をなかへ入れてくれませんか。」と呼ぶ聲がいたしました。

「誰でせう？」

さう思つて王女はすぐ立つて行つて、戸をあけて見ました。すると其處には、昨日の蛙がちよこんと手をついて坐つてゐるではありませんせんか。王女はびつくりして、ばたんと戸をしめるなり、いそいで元の場にかへつてしまひました。その様子がなんとなくへんですから、王女さまは、



「どうしたの。なにをそんなに怖がつてゐるの。え、大男でもやつて来たのかね？」

と言つて、王女にお訊きになりました。

「いゝえ。大男じゃありません。きたない蛙なんですけれど。」

「え、蛙。蛙がどうして来たのです？」

「お父さま。わたしは昨日、蛙とかうかう云ふお約束をいたしましたの。でも蛙がこんなところまでやつて来るとは、ちつとも思はなかつたのですもの。蛙は今そこにあつて、ここへ入れてくれと言つてゐるのです。」

王女はさう言つて、王さまに譯をはなしました。その時蛙がまたコツコツと戸をたゝきながら、



「あけてください王女さま、

一ばん末の王女さま、

泉のそばの木のかげで

昨日あなたの言つたこと、

あの約束をわすれずに

あけてください王女さま。」

と、こんな歌をうたひました。

王女は困つてしまつて、そつとお父さんのお顔をうかがひますと、

王さまは蛙を追ひかへすどころか、かへつて、

「おまへ、約束はまもらなければいけないよ。サア、早く戸をあけて入れておやりなさい。」



と申しました。王女がしかたなしに、戸をほそ目にあけると、蛙はそのあひだから、びよん／＼と嬉しさに跳びこんでまわりました。そして王女のあとについて、椅子のそばまでやつてきて、

「僕もそこに坐らせてくださいね。」

と言ひました、王女が怖がつて手を出さずにあると、載せておやりと王さまがお言ひつけになりました。ところが蛙は椅子にすわつただけでは、まだ承知しないで、今度は食卓のうへにのせてください、と頼みました。そこで王女がこわごわ載せてやると、

「王女さま、その黄金のお皿を、もつと此方へよせて下さい。そして二人で一しよに食べませう。」

と蛙が申しました。王女はしぶしぶ蛙のいふとほりになりました。



王女が一口も咽喉をとほさずにあるうちに、蛙は美味しうにすつかり食べものをたひらげてしまひました。そして蛙はおしまひになると「ごうも御馳走さま。ところで僕は大人へんくたびれてゐますから、ごうか王女さま、あなたの絹の寢床の用意をしてください。そして二人で、もう寝ませう。」

と言ひだしました。王女はもう觸るのさへ嫌な、この冷たい蛙が、じぶんの美しいさつぱりした寢床でねむるのかと思ふと、もう思ふだけでも身ぶるひがして、たうとうしくしくと泣きだしました。

王さまはそれを御覧になると、

「困つてゐるときに助けてもらつたものを、いまになつて粗末にしてはいけないよ。」



と叱るやうに、王女に言ひきかせました。

王女はほつそりとした二本の指のさきで、蛙をつまみあげると、じぶんのお室へもつてきて隅つこに置きました。そして蛙はそのまゝにして、ごちぶんの寢床へお入りになると、蛙はやつぱりのこのこと寢臺のそばまで動いてきて、

「僕は太へんくたびれてゐますから、眠たくツてく仕やうがありません。どうぞ僕を寢臺へあげてください。さもないとお父さんの王さまに言ひつけてあげますよ。」

と言ひました。その憎らしい口ぶりに、王女はもう辛抱しきれなくなつて、

「いやらしい汚ない蛙め。かうすればお前のいいほど休めるよ。」

と叫ぶなり、いきなり蛙の足をつかみあげると、力まかせに壁にたたきつけてやりました。

### (三) はぢけた鐵帶

みなさん。蛙はべちやんこになつて死んだと思ひますか。いいえ。蛙はばつたりと床のうへに落ちましたけれど、その時にはもう蛙ではなく、たちまち一人の美しいやさしい目をした王子にかはつて、つこり其處に立つてゐたのです。

その王子は王女にむかつて、かう話しました。

「僕はわるい鬼婆の魔法にかゝつて、蛙にされてゐたのでした。しかし誰ひとり僕を泉からすくつてくれる力はありませんでした。たゞあ





なただけが、さういふ力をもつてゐたのです。僕は明日、あなたをお伴れして、僕の國へかへることにしませう。」

王子は王さまのおのぞみによつて、王女のお婿さまにきまつたのでありました。

そのあくる朝、お日さまが空にのぼりますと、八頭の白馬にひかれ、一臺の立派な馬車が、お城の入口までお迎ひにまゐりました。八頭の馬は、めいめい頭に白い羽毛をかざり、黄金の馬勒をつけてゐました。

馬車のうしろには、若い王子の忠義な家來ハインリツヒが立つてゐました。ハインリツヒは御主人の王子が蛙のすがたにされた時、あまりの悲しさに心臓がやぶれたりしないやうに、胸のまはりへ三本のか



たい鐵の帯をまいたのでありました。

馬車はわかい王子と王女とをのせて、王子のお國へとむかふのであります。忠義なハインリツヒは、御主人と王女とをおのせしたので、じぶんは、うしろの方にのりました。

間もなく馬車は、わかい王子と美しい王女とをのせて、ひろい緑の野原を威勢よくはしつてゐました。その時パチンと何か割れたやうな物音がいたしました。もう一度、またもう一度、パチン〜といふ音があたりにはびきわたりました。

王子はふしぎに思つて窓から首をだしながら、

「ハインリツヒ。馬車がこはれたのかね？」  
と言つてきました。





「いいえ。王子さま。」

ハインリツヒは、にこにこして答へました。

「あなたさまが蛙のすがたにかへられた時、わたしは悲しくて、心臓が破裂しさうでしたから、胸のまはりに鐵の帯をしめておいたのです。それが今はちけてしまひました。」

まつたくその音は、ハインリツヒが御主人のお幸福を大よろこびによろこんだので、胸のまはりの鐵の帯が胸の動悸でばらばらと弾けておちた音なのであります。

## 漁夫の夫婦



## (一) 赤いひらめ

むかしむかし、ある海邊に漁夫の夫婦が住んでをりました。漁夫は大層貧乏でしたから、毎日釣棹をかついで魚を釣りにゆかねばならぬのでありました。

ある日のことです。漁夫はいつものやうに岩の上に腰をおろして静かに糸をたれてをりました。海はまつさを澄んで、底までも見えるやうでした。漁夫はぼかぼかと暖かい太陽の光をあびながら魚のかわるのを待つてゐましたが、その日はどうした事か、いつまでたつても小魚の一匹もかゝりませんでした。

「不思議だなあ、こんないゝお天氣なのになんにも釣れないなんて、

どうした事だ。もう日も暮れかけて来たのにうきさえ動かない。」

と漁夫はひとりごとをいひました。

すると浮標がくつくつと動き始めました。

「おやつ、かゝつたのかな。動くぞ、うごくぞ、大分大きさうだ。」

漁夫は力一杯に棹を持ちあげました。大きな平たい魚が、赤い鞠毬のやうに、空にとびあがりました。

「しめた。大きな奴だ。赤鯛だ。」

と漁夫は叫びながらびんびん跳ねてゐる魚を抑えつけてしまひました。そして、やつとつかまえて魚籠の中へ入れやうとした時、

「待つて下さい、私は鯛ぢやありません。ひらめです。赤いひらめです。だから助けて下さいな。」





とその魚が叫びました。

「なに、ひらめだつて！嘘をいへ………あつ、まったくひらめだ、赤いひらめだ、へえ——妙な魚がかつたものだなあ。」

「早く海へ歸して下さい、そんなにのんきに眺めてゐては私が死んでしまふぢやありませんか、私はひらめでも、たゞのひらめぢやないんです。魔法にかけられた王子なのです。だから早く助けて下さい。」赤いひらめは苦しそうにあばれ出しました。漁夫はすつかり驚いてしまつて、

「王子だつて？魔法にかけられた王子だつて！これは大變だぞ、どうせひらめなんかうまくはないんだから、海へ歸してやらうよ。」と漁夫は魚を水の中へ投げこみました。



「今日は駄目だ、せつかく釣れたかと思ふと魔法にかつた魚だなんて、もう歸らう、歸らう、口をさく魚なんて眞平だ。」

と漁夫は投げ入れた魚の行く方を眺めながらさういひました。魚は長い血の筋を残して海底に沈んでしまひました。

漁夫の家ではお上さんが歸りの遅いのを心配してゐました。

「どうでした、今日は。」

「駄目だ、なんにも釣れない。」

お上さんはそれを聞くとびつくりして尋ねました。

「え、一尾も。」

「うん、一尾はとれたよ、魔法にかつてる王子のひらめをな、赤い色をしてゐたから氣味が悪くなつてにがしちやつた。」



と漁夫はつまらなそうにいひました。

「それでお前さん、何か王子にお願いでもして逃してあげたのかい？」

「いや、お願いなんかなんにもしないよ。」

「馬鹿だねえ、魔法にかゝつた王子様なら何でもかなえて下さるよ。

そのまゝ、海へ歸してやるなんてお前さんはなんて間拔だらう？。これからもう一度海へ行つてこの汚い家を奇麗な家にして下さいつてお願いして下さいよ。」

とお上さんは大層怒つて漁夫を怒鳴りつけました。漁夫はどうしてもお上さんのいふことが無理だと思ひましたけれど、かう答へておきました。

「こんなにおそくなつて、海へは行かれないよ。明日、赤いひらめに



會つてお前の願を話してみるよ。」

### (二) 第一の望み

漁夫は次の朝、早く海岸に向つて家を出ました。その日は海の色が昨日のやうに澄み切つてはゐませんでした。あの眞青に澄んでゐた海面が黄味がかつて緑色に濁つてをりました。漁夫は時々吹く風にさらさらと湧いてくる小波を眺めながら釣針にゑさをつけました。そして海に向つて次のやうに叫びました。

海の中のひらめやあい、

こゝまで来てお呉れ。

私のお上さんが、



お前に頼みたいことがあるのだ。

大きな聲が海の向ふまでがんと響いてゆきました。すると昨日捕った赤いひらめが黄味がかつた海からひよつこり顔を出して遊びで来ました。

「何か御用ですか。」

と赤いひらめは聞きました。

「お願があるんだよ。私のお上さんが綺麗な家造つて呉れつていふのだ。いくら魔法にかゝつた王子だつて、そんなことは出来まいね。」

「いゝえ、何でもありません。さつそく造つてあげませう。」

赤いひらめはなんでもないことのやうに答へました。漁夫はそれを聞き嬉ばしそうには、笑いました。



「造れるつて、それはほんとかい。有難う、だが一體いつ出来るんだ。」と漁夫はいひました。

「歸つてごらんさい。家は出来てるから。」

ひらめはさういつて急いで海の底に沈んでしまひました。漁夫は不思議なことがあるものだと思つて釣をやめて家に歸つてゆきました。漁夫が自分の小屋の前まで来ますと、その小屋は小さいけれど綺麗な家に變つてゐました。

「これが、私の家なのかな、いや、ちがふやうだぞ。」

とひとりごとをいひながら裏に廻つて内を覗きました。その時、家の中から、お上さんがかけ出して来ました。

「まあ、どうです。私のいつた通りぢやありませんか。そんなにぐづ



ぐずしてゐないで早く家へおはいりなさいよ。これはあなたの家なんですよ。」

お上さんは嬉しくて、嬉しくてたまりませんので漁夫の手をひつぱりながらころげこむやうに家の中へ入りました。

家はいままでの汚れた小屋とは異つて、新しい白い壁や、すべすべした床柱や、障子がきちんとはまつてゐました。臺所には見たこともないやうな陶器や、ナイフなどが行儀よく並んでゐました。そして美味そうな罐詰や肉や、野菜なども、ぎつちりそろつてゐました。漁夫はびつくりして目をぱちぱちさせながら聞きました。

「どうもおかしな話した。まったくお前の望んでゐた通りになつてしまつた。いつごろこの家が出来たんだい。」



「あなたが海へ行つてから間もなくのことです。私の考へることに間違ひなんかあるもんですか。さ、もつとこつちにいらつしやい。」

とお上さんは雲雀のやうに囀りながら漁夫を庭に案内しました。そこには小ぢんまりした花園があつて、その向ふの畑には大きな牛が何匹も寝ころんでゐました。

「明日から、乳を絞るんです、あの牛も畑も私達のもですよ。」

とお上さんは自慢さうに話しました。そこで漁夫の夫婦は不自由なく暮しました。

### (三) 第二の望み

そのうちに、お上さんは、この小さな家に住んでゐることが嫌にな



りました。

「ねえ、また海へ行つて赤いひらめにお願ひして来て下さい。」  
ある日、お上さんは漁夫にいひました。

「何をお願ひするんだ。こんな立派な家に樂々と暮してゐるんだから、  
外に困ることはないぢやないか。」

と漁夫は怒の深いお上さんに答へました。

「今度はこの國で一番のお金持にして下さい。」

「何、お金持だつて、馬鹿な、そんな望はやめにしなさい。そんなこ  
との出来る筈はないのだから。」

と漁夫は馬鹿なお上さんに教へました。けれどもお上さんはどうし  
ても、漁夫のいふことを聞きませんでした。



次の朝、漁夫はしばらくぶりで海岸に立ちました。その時、海から  
はいやな臭がぶんと漁夫の鼻を突くやうに流れて來ました。海は  
泡が立つて、時々大きな波が起りました。そして、この前、黄味がか  
つてゐた海面は赤味がかつた灰色になつてゐました。漁夫は幾度か止  
めやうと思ひましたけれど、たうとう大きな聲を張りあげてひらめを  
呼びました。

海の中のひらめやあい、

こゝまで來てお呉れ。

私のお上さんが、

お前に頼みたいことがあるのだ。

すると赤いひらめが赤味がかつた泡の中からぼつかりと浮び出しま



した。

「何か御用ですか。」

どひらめは唸愕そうに目をばちばちやりながら聞きました。

「またお願があるんだよ。お上さんがこの國で一番の金持になりたいといふのだ。」

「あやすい御用です。家に歸つて御覧なさい。」

漁夫は魚が波間に消えてしまふと、とぼとぼと家に向つて歸り初めました。路の途中で漁夫は立派な馬車が走つて来るのに氣がつきました。馬車は黒く塗つてあつて、二匹のたくましい馬がどつとどつとまるで風のやうにやつてきました。

「王様の馬車かな、どうも立派なものだ。こんな田舎に何の用がある

のだらう。」

その馬車は漁夫の前でびつたりと止まりました。そして御者臺からは白い羽根のついた帽子をかぶつた馬丁がいそいで飛びおり、漁夫にうやうやしく頭をさげました。

「さ、さ、お乗り下さい。旦那様。あなたは國中で一番の大金持になつたのです。」

漁夫は、では魚のいつたことがほんどになつたのだ、と思ひながら馬車に乗りました。馬車はかつかつと音をたてて、やがて立派な屋敷の前にとまりました。そこには、あの小さな家の跡に見あげるばかりの建物が空に聳えておりました。

「これは何です。」





と漁夫は馬車を降りながら、馬丁に聞きました。馬丁は不思議さうに漁夫をみつめて、

「これはあなた様のお屋敷ではございませんか——旦那様がお歸りになつたぞ。」

と馬丁は奥の方に向つて呼びました。大勢の召使がそれを聞くと、あわて、飛出して來ました。そして漁夫の前にづらりと並んで丁寧な頭をさげました。

「これは、これは、お歸りでございますか。」

と召使の長がうやうやしく申しました。すると漁夫のお上さんが目も眩むばかりの美しい着物をきて静かに扉をあけて現れました。

「私の思つた通りです。私のいふことに間違はありませぬ。遠慮しな

いでこちらにも通なさい。」

お上さんは漁夫の手を引いて、軟い絨氈を敷きつめた廊下を通りました。廣い壁には古くからの名高い繪が掛けられてあり、華美な寢椅子などがごちやごちやと置かれてありました。夫婦はこれからこの家の主人となつて朝夕、上等な食事をして、立派な花園を眺めて暮しました。

#### (四) 第三の望み

「もうお前はこれで満足したらうね。」

と漁夫は或る日、お上さんにいひました。

「いゝえ、私は、もう、こんな暮しにあきあきしてしまつた。今度は



王様になつてみたいと思ふわ。」

「また、そんなことを考へたのかい。これ以上の望みを起すものぢやないよ。」

と漁夫はお上さんを叱りました。お上さんは漁夫がさういふと、急に怒り出して、

「なんですつて、これで満足しなさいですつて、私はもう、こんな金持なんかにはあきてしまひました。私は王妃になりたくなつたから、あなたは王様におなりなさい。」

とお上さんは口を尖らしながら漁夫にいひました。

「また、赤いひらめに頼むつもりなのだらうが、それはいけないよ、もう私はそんな無理な願は出来ないからね。」



と漁夫はいひました。けれど、たうとうお上さんにはかなはなくて明日また海邊にやられることになりました。お上さんは明日のことを考へると、うれしくて、うれしくていつまでも眠られませんでした。

そのうちに東の方が赤くなつて、金色のお日様がゆらゆらと立昇りました。

「さあ、夜が明けましたよ、早く起きて赤いひらめに王様になれるやうに願ひしておいでなさい。」

とお上さんはぐつすり寝込んでゐる漁夫をつゝきました。漁夫はいいやながら仕度をして出掛けました。

海は真黒に濁つて、どぶんどぶんど大きな波が岸で崩れました。そして、いままで晴れてゐた空が急に曇つて、大風が吹き始めました。



たくさんの漁船は木の葉のやうに、波の間に見えたりかくれたりして  
りました。漁夫はこれを見ると急に恐ろしくなりましたが、ふるえな  
がら悲しい聲でひらめを呼びました。

「今度は何です。」

とひらめは大きな渦巻の間から訊ねました。

「あろう、こんどは王様に——。」

と漁夫はそこまでいつて急に言葉が出なくなりました。

「さうですか、王様に。おやすい御用です家に歸つて御覧なさい。」

とひらめはいひながら波に乗つて沖の方に游いで行きました。

漁夫が家につくと、そこには立派な王城が出来ておりました。そして

漁夫が門を入ると、たくさんの兵隊が規律正しく、兩側にならんで、

らつばや、大鼓を一時に鳴らしました。そこで漁夫は、すつかり王様  
になつたつもりで、黄金の王冠をかむり、金の杖をついて、寶石をち  
りばめた椅子に腰かけました。それと同じやうに、お上さんもお妃に  
なり、金剛石を彫んだ、黄金の冠をかぶつて、美しい着物をひきすつ  
てあるきました。

「たうとう、王様になつた。これでもう、不足はないだらう。」

と漁夫はおちつかない格好でお妃にいひました。

「え、もう望みはありませぬ。」

とお上さんはいにこにこしながら答へました。六人の侍女が後からお  
妃の着物の端を持って従ひました。



(五) 第四の望み

けれども、お上さんは、お妃も嫌になつて来ました。毎日、お美味いものを喰べて、美しい着物を着て、立派な車に乗つてることが、面白くなくなりました。お上さんは、どうかして珍らしいことがしたいと考へはじめました。

或る日、漁夫の王様に向つて、

「ねえ、私はもうお妃なんかつまらなくなりました。こんどは月と日と一緒に昇らせることが出来るやうに、あの赤いひらめに頼んで来て下さい。」

といひました。漁夫はびつくりして、



「月と日と昇らせる、そんなことが出来るものか、王様になれば、これ以上のことはないんだ。」

と劔を杖にして答へました。

「いゝえ、出来すとも、よく考へて御覧なさいな。私達は初め漁夫だつたでせう。それからお金持にも王様にもしてもらつたのです。ですから月と日と一緒に昇らせる事なんか、ひらめに頼めばなんでもありません。」

次の日、漁夫は悪いことでもしに行くやうに、身體をぶるぶる震せながら海邊へ歩いて行きました。

「いくら魔法にかゝつた王子だつて、そんなことは出来まい、あんな望みを起さなくてもいゝんだがなあ。」



と漁夫はなさげなそうに呟きました。

海は大變な暴風雨でした。漁夫は、もう少しで海の中に吹き飛ばされさうでした。漁夫は、しつかりと岩につかまつて、海の面を眺めました。海は眞黒に濁つて、山のやうな波が、すさまじい勢で、おしよせて來ました。空も、やはり眞黒で、雷ががらがらと鳴り、電光がびかびかど目を射るやうに光りました。漁夫はいまままで、こんな恐ろしい暴風雨に出逢つたことはありませんでした。そして思はず、いつものやうに叫びました。

海の中のひらめやあい、

こゝえ來てお呉れ、

お上さんが用があるとよう。



と死物狂ひで、岩につかまつてゐました。すると、あのひらめが、その大波の中から、飛び上りました。

「何か用があるんですか。」

「いゝや、私を助けてお呉れよう、風に吹き飛ばされさうだから。」

と漁夫は、お上さんとの約束を忘れて、泣き出しました。

「もう、ちよつと、我慢なさい。暴風雨はやがて、静かになりますよ。それよりか、何か御用があるんですか。」

とひらめは、やさしく尋ねました。

「あゝ、お上さんが、日と月をいつしよに昇らせたいのだつて。」

「そんなことですか。お易い御用です。」

とひらめは答へて、ひらりと身を翻して、渦巻の中に消えてしま



ひきました。漁夫はごうなることかと、ひらめの消えた、波の間を眺めておますと、その暴風雨は、ばつたりと止んでしまひました。そしてお日様がきらきらと輝き始めて、空はからつと晴れてきました。そこで漁夫は、岩から離れて、やうやくのことで立上りました。「ごうも、恐しいことだつた。もう少して命をなくしてしまふ所だつた。やれやれ、ひらめはまた日と月をのぼらせることが出来るやうにして呉れたが、今度はどんなことをすればよいのか。」

と漁夫は、それを考へながら、お城に立還りました。

漁夫がお城のあつたと思ふ所へ来て見ますと、そこには、もう、あの立派なお城はなくて、一番初めに住んでゐた、汚い自分の家がありました。そして、その家には、いままでお妃だつたお上さんが、また



漁夫のお上さんのやうな姿で、しよんぼりと坐つてゐるのでありました。

いさましい仕立屋

(一) 蠅 征 伐

からりと晴れわたつた夏の朝のことでした。からだの小さい仕立屋が、あけはなした窓のちかくで、いつものとほり裁板にむかつて、せつせと縫ひものをしてをりました。

すると一人の百姓女が、

「いいジャムはどうかね。やすいジャムはどうかね。」

と呼びながら、仕立屋の窓のしたをどほりかゝるのでありました。

ちひさい仕立屋は、その聲をきくと、急にジャムがほしくなつて、窓から小さい首をだしながら、

「おあい。おかみさん、おかみさん。」



と呼びました。

おもたい籠を頭のうへにのせた百姓女は、階段を三つのぼつて、仕立屋のうちへあがつてまわりました。仕立屋はジャムのはいつた壺をみんな一々あけさして見ました。そして手にとつて見たり、鼻さきへもつて行つて匂ひをかいでみたり、さんざんしらべた揚句、

「このジャムが、おいしさうだね。おかみさん。三十匁では多すぎるから、十五匁おくれ。」

と言ひました。

百姓女は、もつとどつさり買つてもらひたかつたのですが、なにしろお客さんが、こんな小さな人ですから、十五匁だけおくと、ぶつぶつこぼしながら、通りへ出てゆきました。そしてまた、







「いいジャムはどうかね。やすいジャムはどうかね。」  
と呼びながら、行つてしまひした。

「これは大へんいいジャムだな。これを食べたら、勇氣と力がつくだらう。」

仕立屋は戸棚からパンをとりだしてきて、大きく切ると、さつそくいま買ったジャムをつけました。

「これは美味しさうだ。が、おツと食べるまへに、あのチョツキをしあげておかう。」

と仕立屋は、パンをそばにおいて、縫ひかけのチョツキにとりかゝりました。ところが嬉しさに氣をとられてゐたものですから、だんだんだんだん針の縫目がのびてしまつたのです。



ジャムは、ぶんぶんと甘いにはひを立ててゐます。壁のうへにとまつてゐた、たくさんの蠅が、そのにはひをかぐと、眞黒になつてジャムのうへにたかつて來ました。

「こら！だれがお前たちに來てくれなんて言つたんだ。」

小さい仕立屋は蠅どもを追つばらひながら、かう怒鳴りつけました。が、しかし蠅には人間の言葉がわかりません。まへよりもつと澤山のなかまをつれて、ぶんぶんたかつてまゐりました。

仕立屋はたうとう癩癩をおこして、なにかいい武器はないかと思ひます。ちやうど手ごろの布つばしが一枚ありました。そこでそれを手にとつて、

「さッ、かうしてくれるぞ。」



と叫びながら、びゆう／＼とふりまはしました。かうして殺した蠅のかずをしらべますと、みんなで七ひきありました。

「ごうだ、僕のこの勇氣は。」

と仕立屋は、すつかり自分の力に感心してしまひました。

「ひとつ町中の奴に知らせてやらなければならぬ。」

そこで大いそぎで、一本の帯をつくると、そのうへに大きく、「一撃七殺」といふ文字をぬひつけました。

「町中、いや小ぼけな町中どころではない。ひろい世界中に、これを知らしてやらなけりやならぬ。」

さう獨りごとを言ひながら、仕立屋はうれしさうに胸をおごらせました。



## (二) カ くらべ

さて、この小さい仕立屋は、「一撃七殺」といふ文字をぬひつけた帯をしめ、帽子をかぶり、一本の杖を手にすると、いよいよひろい世界の旅にでかけることになりました。

「もう、なにか持つてゆくものはないかしら？」

さう思つて家のなかを見わたしても、チーズと飼ひなれた一羽の鳩のほかには、何にもありません。でも、なにもないよりは増した、と仕立屋は、その二つをふどころにして出かけました。

仕立屋は元氣よく、あるいてゆきました。重たいものは何にも持たぬのですから、體はちつともくたびれませんが、ずんずん歩いて行くこ



高い山にさしかかりました。仕立屋がその山道をのぼつてゆくと、山の  
一ばん頂上に、一人の大男が、氣樂さうに腰をおろして休んで  
るのでした。

仕立屋は大男のまへへづかづかやつてゆくと、

「やあ、今日は。君はこんなところに腰かけて、ひろい世界をたのし  
そうにながめてゐるね。僕はこれから好い運をさがしに出かける途  
中だが、どうだ、君も一しよについて来ないか？」

と話しかけました。ところが大男は、小さい仕立屋を見るとすつか  
り輕蔑して、

「なんだ、小せがれめが！」

と、破鐘のやうな聲でとなりつけました。そこで仕立屋は上衣のボ



タンをはつしながら、

「このとほりだ。これを読んだら、俺がどんな人間かわかるだらう。」

と言つて、帯を見せました。そこで大男が腰をかゝめて覗きこむと

「一撃七殺」と書いてありました。大男は、それを讀んで、この小男

が一撃で七人の人間を殺したのか、ちやあ、餘り馬鹿にならないぞ、と

考へました。そして、

「よし、どちらが強いか、くらべっこしよう。」

と言ふと、まづ大きな石を手にとつて、ぐつと握りしめました。す

ると石から、ぼたぼたと水がしたたりはじめました。

「さあ、やつて見ろ。」

大男はさう、仕立屋にむかつていひました。



「つよい奴と思はれたかつたら、このどほり遣つてみる。」  
「なんだ。それだけのことか。よし、僕だつてすぐやつて見せるぞ。」  
と仕立屋は平氣な顔をして叫ぶと、ポケットのなかから柔いチーズをとりだしました。そしてぐつと掴むと、乳がたらたらとながれだしました。  
「さあ、ごうだ。僕だつて偉いだらう。」  
仕立屋は得意になつて叫びました。さすがの大男も、それがチーズだとは氣がつかませんから、返事につまつてしまひました。そしてこんどは、石をひろひあげて力いっばい空にはふり投げました。石は眼のどまかないほど、高く高くあがつてゆきます。  
「さアごうだ。やれるならやつてみる。」



「うん、なかなか巧く投げたな。でも君の石は、いづれ地べたに落ちてくるだらう。」  
仕立屋は負けずに、かういひます。  
「ところが僕は、もつと高くはふるのだ。僕の石は、もう二度と地べたには落ちて来ないのだぞ。」  
仕立屋はポケットのなかから、さつきの鳩をとりだすと、いきなり空へなげました。鳩は窮屈なところから、ふるに放されたので、うれしさうにぱたぱたと高く飛んで行きました。そしてたうとう見えなくなつてしまひました。  
「おい、ごんなもんだ。」  
仕立屋が大威張でさういひますと、大男はしかたなしに、



「うん。君はまったく上手だ。」

と答へましたが、やがて、

「じゃ、これから擔ぎツくらをしよう。」

と言つて、小さい仕立屋を森のなかにつれてゆきました。そこには大きな檜の木が、ごろりと横にたふれてゐました。

「さあ、手つだつて、この檜を森からはこびだしてくれないか。」

と大男が言ひますので、仕立屋は、

「よし来た。じゃ、君は幹のはうをかつげ。僕は一ばん重い枝のはうを、みんなもつてやるから。」

と答へました。そこで大男が、ぐいと幹を肩にかつぎあげました。

ところが、づるい仕立屋は、じぶんも擔いでゐるやうに見せて、こつ



そり枝のうへにのつて、すわりこむと、

「こんな仕事は、まるで子どもの遊びみたいなもんだ。」

と言はぬばかりに、呑氣さうに口笛をふいたり、歌をうたつたりいたしました。大男は首もまはせないから、そんなことは知りません。そのうちに、さすがの大男も、すつかり疲れてしまつて、

「ちよつと待つてくれ。もう下ろすよ。」

と弱音をふき出しました。仕立屋はこつそり枝からとびをりると、

さも今まで擔いで来たやうな様子をして、両手で木をつかみながら、

「君みたいな大男が、こんな木ぐらゐ運べないのかなあ。」

と、さんざん大男をわらつてやりました。



(三) 洞穴の中

それから二人がずんずん歩いてゆくと、道ばたに一本の櫻の木があつて、そのさきに熟した櫻んぼうがなつてをりました。大男は雑作なく櫻の木を折りまげると、

「どうだ、櫻んぼうをたべないか。」

と仕立屋に言いました。仕立屋が櫻の木に手をかけたとき、大男がいきなり手をはなしました。勿論仕立屋には櫻の木を折りまげてゐる力がありません。木がはねかへると一しよに、仕立屋はいきなり宙へはねとばされてしまひました。

でも幸ひに、怪我ひとつしなで、地べたにあちてまゐりました。



それを見て大男は、笑ひながらいひました。

「なんだ。こんな小さな木を、折りまげることができないのか？」

「力が足りないのじやないよ。君はこの『一撃七殺』といふ字が見えないのか。」

と仕立屋が言ひはりました。

「僕はその木を飛びこしたんだ。なせつて。獵師がむかふで狙つてゐるからだ。君にできるかへ、あの木をこびこすことが。」

さう言はれて、大男はすぐに跳びこして見ようと思ひましたが、枝にぶらさがるばかりで、なかなか跳びこすことは出来ませんでした。

大男はまた、仕立屋にわらはれてしまつたのです。

さて大男は仕立屋にむかつて、



「君はほんたうに勇しい男だ。今夜は僕たちの洞穴のうちに來てとまらないか。」

といひました。仕立屋がよろこんで洞穴のうちへついてゆくと、五人の大男が火のそばにすわつて、羊の肉をやいて夕飯を喰べてをりました。

仕立屋は家のなかを見まはしながら、

「こりやあ、僕の仕事場よりよつぼどひろびろしてゐるわい。」  
と思つてゐました。

そのうちに寝る時分になりました。大男は仕立屋を一つの寢臺につれて行つて、そこに休むやうにいひました。けれどその寢ごこは、體のちひさい仕立屋には、あまり大きすぎますから、仕立屋は寢臺の隅



つこに這ひこんでねむりました。

夜がふけてからのことです。大男は鐵の棒をにぎつて、こつそり忍びよると、仕立屋がぐつすり眠つてゐるらしい寢ごこの、まんなかのあたりを、力まかせにたつきつけました。そして大男は、

「あの蟋蟀め。これで片がついたわ。」

と考へたのであります。

あくる朝、大男たちは、もう仕立屋のことなんかすつかり忘れきつて、森へでかけました。するとむかふから、仕立屋が楽しさうに口笛をふきながらやつてまゐりました。その何ごともなかつたやうな顔つきを見ると、大男たちはびつくり仰天して、あとも見ずにごんごんにげだして行つてしまひました。それから仕立屋は、もう二度と大男た



ちのすがたを、見かけなかつたのです。

(四) 仲間喧嘩

この小さな仕立屋は、そのちながい間旅をつゞけてから、ある國の都へやつてまゐりました。そして王さまの御殿のまへまでくると、大へん體がくたびれてゐたものですから、その芝生によこになつてぐつすり寝こんでしまひました。

そのうちに人々はふと、仕立屋の帯に「一撃七殺」といふ文字があるのを見つけました。

「一撃七殺、一撃ちで七人殺した勇士なんだ。」

と人々は大騒ぎをはじめました。たうとうそのことが、この國の王



さまのお耳にもはいりました。仕立屋がふツと目をさましたときにはもう王さまからのお使ひが、ちやんと待つてゐたのです。

小さい仕立屋が王さまのまへにでますと、王様は、

「おまへは一たい、この國へなにをしに來たのか？」  
とあたづねになりました。

「はい。實は王さまのお助けをいたすために、はるばるやつて來たものでございます。」

そして、仕立屋はこれまでして來たいろいろのでがらを、一々王さまに申しあげました。

ちやうどその頃、この國のはづれに二人の大男がすんでゐて、人々をころしたり物をとつたり、さんざん人民をくるしめてをりました。そ

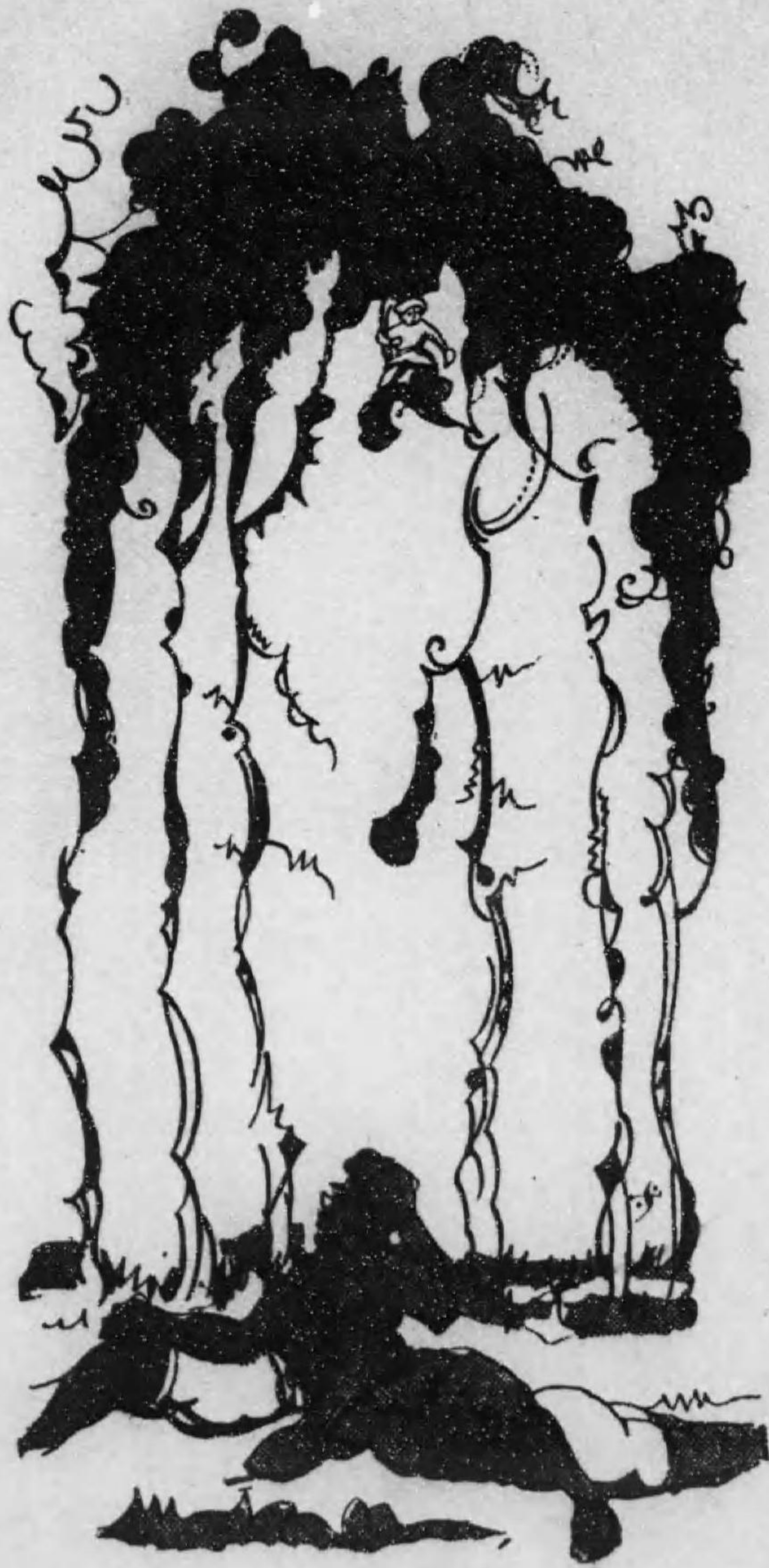




ここで王さまは、そのことを仕立屋にお聞かせになつて、  
「もしお前が話したやうな勇士ならば、百人の武士をつけてあげるから、この大男二人を退治してくれるやう。もしりつばに退治してしまつたら、わしは王女に、この國半分をつけてお前にあげるから。」  
と申されました。仕立屋は譯もなくお受けをして、  
「かしこまりました。いや百人の武士をおつけくださいませんでも、私一人で十分でございます。」  
と申しあげましたが、王さまのお心から、百人の武士はやつぱり、仕立屋のあとをついてまわりました。さうして二人の大男たちが住んでゐるといふ森のちかくへ、やつてまわりますと、仕立屋は武士たちにむかつて、



「君たちはここで待つてゐてください。ちきに僕がいい知らせをもつて來ますから。」  
と言ひのこすと、ただ一人ずんずんおそろしい森のなかへ、すゝんで行きました。やがて大きな木のかげに、話しの大男が二人、ぐうぐう甕をかきながら、ねむつてゐるのが目にはいりました。仕立屋はしばらく様子をうかがつてゐましたが、やがて兩はうのポケットにいっぱい石をつめこむと、大男の頭のうへの大木にするするとのぼつてゆきました。そして大男たちの眞上の枝に陣ごつて、一人の男の胸のうへに、石を一つづつ落としてやりました。すると男はちきに、ひよいと目をさまして、となりの大男をゆすりおこしながら、  
「おい。なせ俺を打つたのだ？」



とぶりぶり怒りだしました。おこされた男はうるさそうに、

「俺が打ものか。おまへ、夢でも見たんだらう。」

と答へました。すると前の男も、さうか、と思つて、また二人ともねむつてしまいました。すると仕立屋は、またもう一人の男をねらつて、石をおとしてやりました。

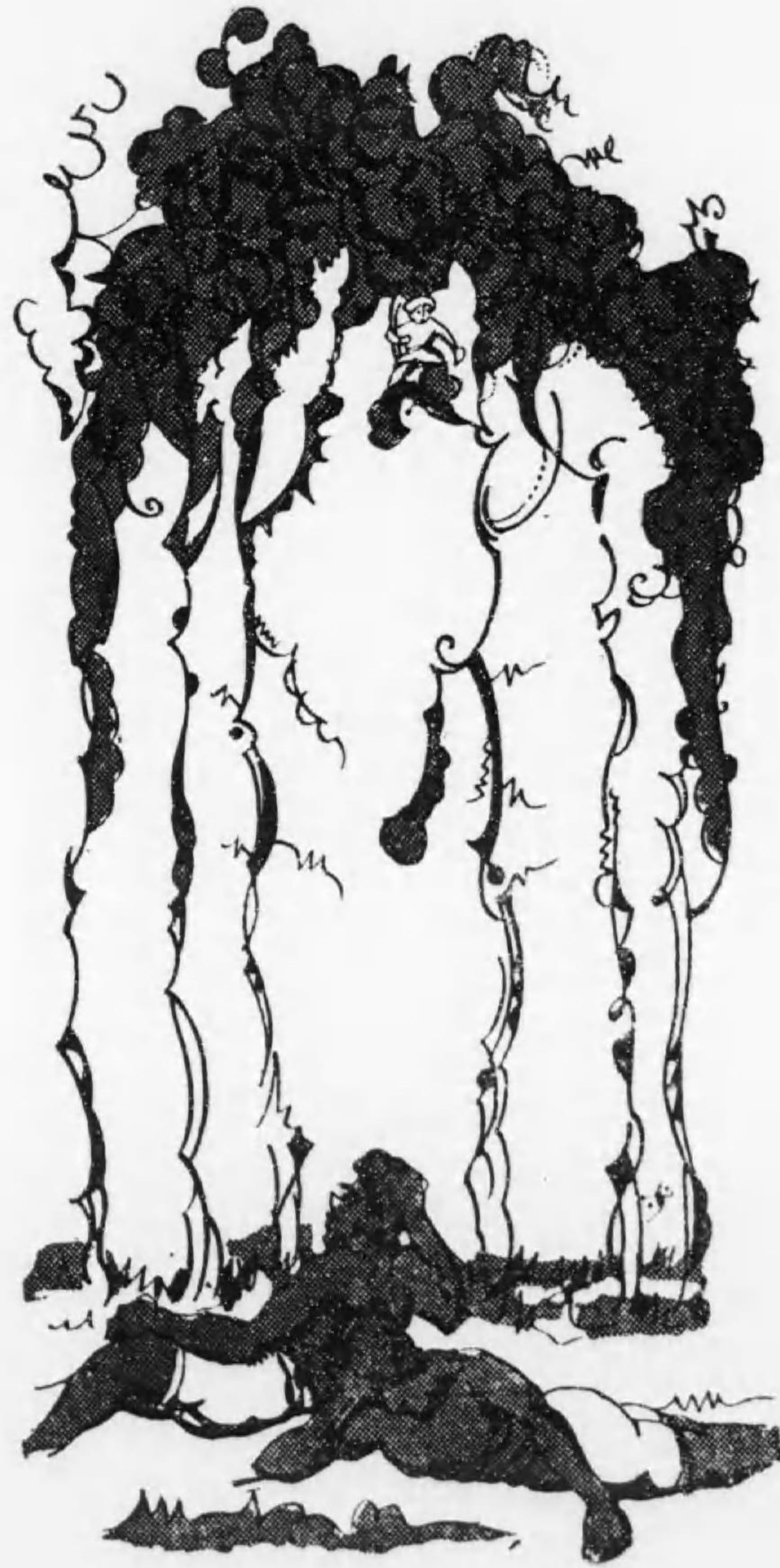
「おい何をする。なにをぶつつけたんだ？」

と大男ははねおきて、怒鳴りつけました。

「俺は觸りもしやしないのに。夢でも見てゐたんだらう。」

と、さつきの大男が言ひました。二人の大男はしばらく争つてゐましたが、たうとう疲れて、横になると又ねてしまいました。

そこで仕立屋は、ポケットのなかから一ばん大きい石をとりだすと



とぶりぶり怒りだしました。おこされた男はうるさそうに、

「俺が打ものか。おまへ、夢でも見たんだらう。」

と答へました。すると前の男も、さうか、と思つて、また二人ともねむつてしまいました。すると仕立屋は、またもう一人の男をねらつて、石をおとしてやりました。

「おい何をする。なにをぶつつけたんだ？」

と大男ははねおきて、怒鳴りつけました。

「俺は觸りもしやしないのに。夢でも見てゐたんだらう。」

と、さつきの大男が言ひました。二人の大男はしばらく争つてゐましたが、たうとう疲れて、横になると又ねてしまいました。

そこで仕立屋は、ポケットのなかから一ばん大きい石をとりだすと



今度はまた、はじめの大男の胸をめぐけて、力いつばいなげつけてやりました。

「あんまり酷い。もう勘弁できぬ。」

大男は氣ちがひのやうに、飛びおきるなり、仲まの大男につかみかかりました。仲まの大男は怒つて、これも負けずにふせぎました。あたりの樹が根こぎにされ、大きな岩がうちくだけてしまふほど、両方の大男は、はげしく戦ひあひました。そしてたうとう二人とも、血にそまつてたふれてしまひました。

「僕ののつてゐた樹が裂かれたりしなくつて、あゝ、ほんとうに助かつた。」

と仕立屋はほつと獨りごとをいひながら、するすると樹からおりる



ど、二つき三つき、劍の柄もとほれど大男の胸をつき通しました。そして待たしておいた百人の武士どものところへ遣つてゆきました。

「やつと大男たちを退治たよ。しかしなかなか大仕事だつた。」

と仕立屋は言ふのでした。

「大男たちは樹まで根こそぎにして防いだけれど、一撃七殺の僕にはかなはないで、たうとう死んでしまつた。」

「で、あなたにお怪我はありませんでしたか？」

と武士たちがたづねました。

「なに、髪一本だつて觸れさせはしなかつたさ。」

仕立屋は得意さうに答へました。武士たちは、なかなか信じかねる様子でした。が、馬を森のなかにのりいれると、そこにはほんとに木

が根こそぎにされ、二人の大男が血にそまつてたふれてゐたのです。

### (五) 王様の難題

そこで、この小さな仕立屋はお約束のお禮をたまはるやう、王さまにおねがひしました。ところが王さまは、その時になつて急に約束したものが惜しくなつて、たうとうこんな難題をあいひだしになりました。

「この近くの森にすんで、さんざん荒れまはつてゐる野牛がある、それを生捕りにして來たら、約束の王女とこの國の半分とをお前にあげやう。」

「大男二人を退治した僕ですもの、野牛なんかすぐ生捕りにして御目に



かけます。」

と仕立屋はすぐお受けして、縄と斧とを手にもつと、ごんごん森の  
そとまでやつてゆきました。ついて来たものはそこに待たしておい  
で、たゞ一人で森のなかへすすんでゆきました。

間もなく一びきの大きな野牛があらはれました。そして鼻のうへに  
つきでた恐しい角をふりたてながら、仕立屋めがけて、とびかゝつて  
まわりました。

仕立屋は野牛がすぐそばへとんでくるまで、ちつと立つておました  
が、急に身をかはして木のうしろにかくれました。野牛はおそろしい  
勢ひで木につきあたつて、木の幹へ、ふかく角をつきこんでしまひま  
した。



仕立屋はさつそく、木かげからとびだして行つて、

「もう僕のものだ。」

と言ひながら、野牛のくびに縄をかけておいて、つきささつた角を  
斧で叩ききりました。かうして生けごつた野牛をつれて、王さまのま  
へへもごつてまわりますと、王さまはまた一つの難題をお言ひだしに  
なりました。

それは猪をいけごりにすることでした。

「おやすい御用です。」

と仕立屋はまた譯もなく承知すると、猪のどるといふ森へゆきまし  
た。

猪は仕立屋のすがたを見つけると、口から泡をふき、するどい牙



をむきながら、おそろしい勢ひでむかつてまわりました。仕立屋はすこしもさわがずに、すぐわきにある堂のなかに走りこむと、又こつそりと窓からとびだしてしまひました。そのとき猪は仕立屋のあとを追つて、堂のなかへとびこみましたから、仕立屋は外をまはつて、入口の戸をばたんとしめてしまひました。猪は體が重いので、窓からとびだすことも出来ません。かうして猪も難なく、仕立屋のために生けざられてしまひました。

そこで王さまは今度はしかたがないので、まへの約束ごほり、王女とその國の半ぶんとを、仕立屋へおつかはしになつたのです。いさましい小さい仕立屋は、そのときから立派な王さまになりすますことになりました。

### 片すみのお祖父さん



むかし、ひとりのおぢいさんが、息子とそのお嫁さんと一しよに、くらしをりました。

そのおぢいさんはもう大へん年をとつて、目がかすみ、あるくときには、よろよろと膝がよろめくのでありました。そればかりか耳も大へんとほかつたのであります。

食卓にむかつて御飯をいただくとき、おぢいさんの手はぶるぶるとふるへました。そのためにおぢいさんは、よく、食卓かけや着ものなにかに、汁をこぼしては汚すのでした。いや時には、口からたらたらと、ものをこぼすことさへもあつたのであります。

おぢいさんのそんな様子を見ると、息子夫婦は、たいへん嫌なにかい顔つきをいたしました。そしてしまひにはおぢいさんだけ食卓をべ



つにして、室のすみの衝立のかけに椅子をおいてやりました。おぢいさんは其處でひとりきり、みんなとはちがつた瀬戸の鉢に食べものをもつてもらつて、御飯を喰うのです。おぢいさんは時をりなみだぐんで、さびしさうに、みんなのはうの食卓をふりかへるのです。しかし決して、愚痴をこぼしたことはありません。多分、いくら愚痴をこぼしても仕方がないと諦めてゐたのでせう。

ある日おぢいさんは、御飯をたべながらいろいろと昔のことを思ひだしてをりました。おぢいさんはそのときうつかり、瀬戸ものの鉢を下にどりおとしてしまつたのです。手がぶるぶるとふるへて、さうへる力がなかつたからでありました。鉢はがちやくと音をたてて、わ





わかいお嫁さんは、おちいさんの粗相を見ると、がみがみと叱言を申しました。おちいさんはほつと吐息をつくばかりで、何とも答へませんでした。

お嫁さんは急いで安ものの木の椀をさがしだしてくると、それに食ものをもつて、おちいさんにあてがってやりました。その時からおちいさんは毎日、木の椀で御飯をたべることになつてしまひました。それからしばらくたちました。

息子とお嫁さんのなかには、五つばかりの子供があつたのです。あるとき子どもは、床のうへにすわつて、しきりと木ぎれでなにか細工をしてをりました。

「坊や。おまへ、なにをつくつてゐるの？」

と子どものお父さんがききました。

「僕はお碗をつくるの。」

子どもが答へました。

「お碗なんか、つくつてどうするのね？」

「僕がおほきくなつたときにね、お父さんや、お母さんにつかつていれどくんだよ。」

と子どもは答へるのでした。

そのとき息子とお嫁さんとは、おもはず顔を見あはしたまゝ、しばらくはちツと口をきくこともできませんでした。息子もお嫁さんも、はじめ室のすみにゐるおちいさんの身になつて考へたのであります。

「わたしたちも年はとるのだ。そして年をとつてから、今のおちいさ





ん見たいに、わたしたちが子どもから、つらい仕うちをうけたら、ごんなに悲しいことでせう！」

いつか夫婦の目から、涙がぼたぼたとこぼれはじめました。

二人はつと立つていくと、年をとつたおぢいさんの手をとつて、まもとの食卓につれてきてあげました。

\*

\*

\*

\*

その日からおぢいさんは、みんなと一しよに御飯をたべるやうになりました。そしてその子供たちから、もう二度とつらい仕うちは、うけないやうになりました。

あ  
を  
い  
火



(一) 古井戸のなか

ながいあひだ、いろいろ王さまのために働らいてゐた軍人がありま  
した。ところが戦争がおはつて世のなかゞしづかになると、王さまは  
その軍人をよびよせて、かう仰言つたのでした。

「もうお前はうちへかへるがよい。おまへには、これから給料をばら  
はない。わしは、わしのためにお金をまうけてくれる者にしか、給金  
はばらへないのだから」

その時軍人はもう何べんも傷をして、かわいさうに不具になつてゐ  
たのです。ですから、この王さまのお言葉を聞くど、すつかり途方に  
くれてしまひましたが、やがてすごすごと都の町をあとに自分のうち



の方へ歸つてまゐりました。

そのうちに道はふかい森のなかに入りました。あたりはもうすつか  
り暗くなつてゐたので、軍人はすつかり困つてしまひました。氣をは  
げましてとぼとぼと歩いてゆくうちに、ふと一軒の小屋から、灯のも  
れるのを見つけてきました。

「おや。誰か人が住んでゐるらしい。」

軍人はよろこんでその小屋の方へ急いでゆきました。實は鬼婆の住  
み家だつたのです、けれども、軍人はさうと知りませんから、

「もしもし。一晚とめて下さいませんか。それから食べものと飲みも  
のを、すこし下さい。僕はお腹がへとへとに減つてしまひました。」  
と言つてたのみました。すると意地わるい鬼婆は、



「不具の軍人さんなんか、なにが土られますか。けれど、それでは可哀さうだから、わたしの頼みをきいてくれたら、宿をかしてあげますよ。」

といひました。

「なんですか。その頼みと言ふのは？」

と軍人がきくますと、鬼婆はいひました。

「明日庭の土をほつておくれ。」

軍人はすぐに承知して、その晩はそこへ宿めて貰ふことにいたしました。あくる日になると、汗みどろになつてどしどし土をほりました。が、その庭の土は晩までかゝつても、掘りきれなかつたのです。」

「あゝ。今日はもうそれでいいよ。今夜もう一晚どめてあげるからね



「不具の軍人さんなんか、なにが上られますか。けれど、それでは可哀さうだから、わたしの頼みをきいてくれたら、宿をかしてあげますよ。」

といひました。

「なんですか。その頼みと言ふのは？」

と軍人がきくまると、鬼婆はいひました。

「明日庭の土をほつておくれ。」

軍人はすぐに承知して、その晩はそこへ宿めて貰ふことにいたしました。あくる日になると、汗みどろになつてどしどし土をほりました。が、その庭の土は晩までかゝつても、掘りきれなかつたのです。」

「あゝ。今日はもうそれでいいよ。今夜もう一晩とめてあげるからね。」



そのかはり明日になつたら、薪を一たば、こまかく割つておくれ。」  
と鬼婆が申しました。

そのあくる日も、薪を割つてゐるうちに、すつかり日がくれてしまひました。鬼婆はまた、もう一晚どめてあげるからと仕事を云ひつけるのでした。

「もつとも明日の仕事はね。それは譯のないことだよ。この家のうしろに水のでない古井戸があるの。そのなかへわたしが、青い消えない火をおとしてしまつたから、お前さんに取つてきてもらふのだよ。」

で、つぎの日になると、鬼婆は軍人をつれて、古井戸のそばへ行きました。そして軍人を籠のなかへ入れると、井戸の底までおろしました。青い火はすぐ見つかつたので、軍人があひづをすると、鬼婆はま



ただだんだんと籠をひきあげはじめました。そして井戸のふちへとどいたところで、鬼婆はいきなり手をのばすと、青い火をひつたくらうとしたのです。けれど軍人は、づるい鬼婆の計略をすぐさとつてしまひました。

「いや、いけない。僕が二本の足で、ちやんと地面にたつまでは、この火はあげられませんよ。」

さう叫んで、軍人は青い火をわたしませんでした。すると鬼婆はぶりぶり怒つて、いきなり軍人を古井戸のそこへつきおとすと、そのままかへつて行つてしまひました。

## (二) 小人のたすけ

かわいさうに軍人は、ごしんと古井戸のそこへ投げだされました。でも幸ひ、怪我だけはなかつたのです。手にもつた青い火は、やつぱり消えずについておました。しかしかうなつては、火なんか何の役にもたちはしません。あゝもう助からないな、と軍人はすつかり覺悟をきめました。そしてしばらくは、ぼんやりと坐りこんだまゝ悲しい物おもひにふけつてゐたのです。そのうちに、ふと軍人が、なに氣なくポケットのなかへ手をつっこむと、指のさきに煙管がさりました。

「あゝ煙管があつたつけ。」

取りだしてみると、どうやらまだ半分ほどの莨が、つめたまゝのこつてゐるやうですから、軍人は、

「これが煙草の吸ひおさめだ。」



と、獨りごとを言ひながら、あをい火で葎をつけました。そしてぶかぶかと煙をふかしはじめました。しろい煙が、すつと立ちあがつて宙にういた時でした。ふしぎな黒い小人が、ひよつくり軍人のまへにあらはれて、

「旦那さま、なにか御用でございますか？」

と言つて訊くのです。軍人は呆氣にとられて、

「なにか御用ツて、どうしたんだい？」

と訊きかへました。

「はい。私はあなたさまの御用でしたら、どんな事でもするのです。」

「あゝ、さうか。」

軍人はうなづくど、まづかう頼みました。



「では、僕をこの井戸から助けだしておくれ。」

小人はすぐ軍人の手をとると、さきに立つてあるきだしました。軍人は忘れずに、あをい火をもつて従いてゆきました。地のしたの道をとほる途中で、小人は、鬼婆があつめて隠しておいた、黄金の寶ものをあしへてくれました。軍人はよろこんで、手にもてるだけその寶ものを持ちました。そしてちききに地面のうへに出ることが出来ました。

軍人は今度は、かう小人に言ひつけました。

「さあ。あのわるい鬼婆を事も足もしほりあげてしまへ。そして裁判所へつれて行つてくれ。」

小人はすぐ、そのとほりにしました。鬼婆は泣きわめきながら、野猫の背なかにのせられて、ごんごん裁判所へひきたてられてゆきました。





た。

「これで済みました。もう鬼婆は、いまごろ絞首臺でころされてゐるでせう。」

小人はさう言つて、また、

「旦那さま、このつぎはどんな御用でございますか？」

と訊くのでした。

「もう今は頼むことがないから、うちへ歸りなさい。しかし僕が呼んだら、すぐやつて來るのだよ。」

さう軍人が申しますと、

「はいはい。お呼びにならなくとも、あなたが青い火で葺をおつけになれば、いつだつて遣つてまわります。」



と小人が言ふのでした。そしてその聲と一しよに、姿もどこかへ消えてしまいました。

### (三) 王女のゆめ

すずすぞ家へかへらうとした軍人は、かういふふしぎな家來ができたものですから、大層得意になつて、又ざんざん都の町へ戻つて参りました。そして町中で一ばん上等の宿屋へとまりました。

立派な着ものを買ひこんだり、宿屋のものに言ひつけて、じぶんの室をびかびか飾らせたりいたしました。かうして仕度がすっかり出来あがると、軍人はまづ、黒い小人をよびよせました。

「僕はこの町の王さまには、すゐぶん忠義をつくして仕へたんだ。そ



れなのに王さまは僕を捨て、しまつた。僕はもうすこしで餓死してしまふやうな目にあつた。僕は口惜しいから、ひとつあの王さまに仕かへしをしてやらうと思ふのだ。」

かう軍人は言ふのでした。すると小人は、

「で、私はどうしたらよろしいでせう？」

と訊きました。

「お前はね。今夜こつそり王さまの御殿へいつて、王女をさらつて來るのだ。僕はあの王女を女中にして、ごんごん使つてやるから。」

「かしこまりました王女をさらつてくるのは、なんでもない仕ごでございしますが、しかしそんな事をしては、あなたのお體が危くはございませんか？」



かういつて小人が心配しましたけれど、軍人はどうしても聞き入れません。そこで小人は仕かたなしに、真夜中になると、こつそり王さまの御殿へしのび入つて、王女をさらつてまわりました。

「やあ、來たな。」

軍人は王女のすがたを見ると、大威張でかう聲をあげました。

「さあ。すぐ箒をもつてこい。そしてこの室を掃除するんだ。」

王女が箒をもつて掃除をしますと、軍人は椅子にすわつたまゝ、今度は足をつきだしながら、

「おい。この長靴をぬがしておくれ。」

と言ひつけました。王女が長靴をぬがせると、軍人はそれを取りあげるが早いか、いきなり王女の顔にぶつつけて、そして顔をあらつて



おいでといひつけました。

王女はちつとも嫌な顔をしないで、なにもかも言はれるとほりにいたしました。やがて夜あけの鶏のこえが聞えて來ましたので、小人は王女を、御殿の寢ごこのなかへおきに行きました。

夜が明けると、王女はさつそくお父さんの王さまのまへへ行つて、ゆふべ見た、ふしぎな夢をお話しました。

「わたしはまるで光がぴかツと射すやうやうな速さで、ごんごん街のなかをつれられてゆきましたの。そして或る軍人のお室につれこまれます、お室をはいたり靴をみがいたり、女中みたいにびしびしと使はれました。たゞ夢なんですけれど、でも本たうに働いたやうにからだがすつかり疲びれてしまひましたわ。」



王さまはそのお話をあききになると、心配さうに

「どうやら、それはたゞの夢ではないらしいぞ。」

と仰言るのでした。

「いや、いい事がある。今夜寝るときには、お前、かくしへ豆をいっぱい入れて眠るのだよ。かくしには小さな穴をこしらへておくのだ。さうすれば豆が道々こぼれるから、もし今夜お前がさらはれて行つても、行くさきがちやんと分るだらう。」

かう王さまが話してゐらつしやるあひだ、小人は姿を見せず、こつそり王さまのそばにひかえてをりました。ですから王さまの考へはすつかり小人にわかつたのでした。

そこで抜目のない小人は、夜になると、町といふ町に、すつかり豆



をまいておきました。そして王女はその夜も、軍人の室にさらはれて女中みたいにびしびしとつかはれたうへ、夜あけの鶏がなくところに、また御殿の寝ごこのなかへかへされたのであります。

朝になると王さまはすぐ家來をやつて、町中をしらべさせました。ところが、王さまの當てはすつかり外づれてしまひました。と言ふのは、町中の通りといふ通りには、しきつめたやうに豆がこぼれて、おほせいの子どもたちが、

「やあ。ゆふへは豆の雨がふつたのだ。拾はう拾はう。」

と言ひながら、おもしろさうに飛まはつてゐたからでありました。

家來たちの知らせをお聞きになると、王さまは悄氣かへつて、

「ふむ、なんか別の計りごとをしなけりやならない。」



と言つて、しばらく考へておいでになりましたが、やがてかう王女にむかつて仰言いました。

「さうだ。今夜は靴をはいたまゝお寝なさい。そして攫はれていつたところへ、片つぼの靴だけおいて来るのだ。朝になつたら、それを探させるから。」

このお話もやつぱり、小人のためにこつそり聞かれてしまひましたで、その晩軍人が王女をさらつて来てくれ、と小人に申しつけますと小人は、

「今度だけはおよしなさいまし、その靴が旦那さまのお室から見つかると、それこそ大へんなことになつてしまひます。」

と言つてとめました。ところが軍人は、いつこう取りあげないで、



「僕の言つたとほりにするのさ。」

と答へたのです。

そこで三日目の晩も、王女はやつぱり攫はれて来て、女中の仕ごとをさせられました。けれど王女は、夜あけちかくなつて、また御殿へつかへられるころになると、片つぼの靴だけ、そつと軍人の寢臺にしたにしのばせておきました。

#### (四) 王女と國を

つぎの朝、王さまはさつそく町中の家へ家來をやると、片つばしから調べさして、王女の靴をさがさせました。靴はちきに、軍人の室から出てまゐりました。



もうその時には、軍人は小人にすゝめられて、ごんごん町の門まで逃げだしてゐたのですが、そこで苦もなく捕へられてしまひました。そしておそろしい牢屋のなかにぶちこまれました。

逃げるとき軍人はあまり周章でたので、つい青い火も黄金の寶ものも、すつかり宿屋の室にわすれて来てしまひました。もつて来たものと言つては、その時、わづか二三枚の金貨しかありませんでした。おもい鎖にしばられたまゝ、軍人はぼんやりと牢屋の窓ぎわに立つて、そとをながめてゐたのです。その時、折よく昔なじみのお友だちが、ひどり、そこを通りかゝるのが見えました。

軍人が窓の横木を手でたゝくと、その人は氣がついて、すぐ窓の下までよつてきてくれました。



「おい、僕だよ、僕だよ。君、すまないが、宿屋へ行つて僕の荷物をとつてきてくれないか。うつかり忘れて来てしまったのさ。そのかはり君にはお禮をするからね。」

さう言つて軍人がたのむと、友だちは承知して、すぐ駈けだしてゆきました。やがて荷物をもつて戻つて来ました。

軍人はひとりになると、すぐ青い火で糞をつけました。小人はもうちやんとそばに立つてゐました。

「旦那さま。御心配はありませんよ。もし連れてゆかれても、安心してゐらつしやい。たゞ青い火だけは、きつとお忘れにならないやうに。」

小人はさう言ふと、またどこかへ行つてしまひました。

あくる日になると、軍人は牢屋からひきだされて、裁判にかけられました。それほど悪いことはしなかつたのに、軍人はかわいさうに死刑を言ひわたされました。

軍人はいよいよ殺されることになつたとき、王さまにむかつて、最後の慈悲をねがひました。

「うむ。最後の慈悲とは？」

王さまがふしぎさうにおたづねになると、

「どうか死ぬまへに、好きな糞を一服すはしていただきたいので。」

と軍人が申しあげました。王さまは、

「では、三だけ吸つてもよい。だが、おまへの命は決して助かりツこないぞ。」





と言つておゆるしになりました。

軍人はよろこんで、煙管をとりだすと、あをい火で葺をつけました。しろい煙の輪がふかりと宙にういたかと思ふと、もう黒い小人が、棍棒を手にもつて、ひよつくり飛びだしてまわりました。

「旦那さま、なにか御用でございますか。」

「あゝ、あのわるい裁判官をたゞきふせてくれ。それから僕をさんざんな目にあはした、あの王さまもかまはず、やつつけてくれ。」

といふ軍人のいひつけに、小人はいきり立つて、手あたりしだいに皆をうちたふしました。たふれたものは、もう二度と動くことさへ出来ませんでした。

この有さまに、さすがの王さまもぶるぶるとふるへだして、地べた



にひれふしながら、

「どうか命だけはたすけてくれ。」

と叫びました。そして、王さまは、平あやまりにあやまつた上、

「この國はみんな、あなたにさし上げます。そして王女は、あなたのお妃にしてください。」

と軍人にお約束をしたのでありました。

ふしぎな木の話





(二) 森のなか

あるちひさい女中が、その御主人と御主人の奥様とにつれられて、遠いところへ旅に出かけてゆきました。

その途中のことでした。三人が、ひろい／＼森の中へ差しかゝりますと、道の兩側の茂みの中から、ふいに大勢の追はぎがあらはれて、「さあ、金をだせ。」

といひながら、きら／＼光る刀をつきつけるのでした。

女中はびつくりして、近くの木かげに逃げこみました。そして、ぶるぶるふるへてをりましたが、そのうちに、追はぎ共の聲もしなくなりましたから、そつと、もとの場所にもどつて見ますと、そこには御



主人と奥様とが、死骸になつてならんでゐるではありませんか。

小さい女中は、おどろいて、しばらくは聲も出ないほどでありました。そして、たゞさめざめと泣くばかりでしたが、そのうちに、

「こんな人ひとり住んでゐない森の中にまごまごしてゐると、お腹がすいて死んでしまふかも知れない。」

と思ひましたので、女中は森をぬけて人里へ出る道をさがさうと、森のなかをあちこちさがしました。けれども道はどうしても見つかりません。

すつかり歩きくたびれた女中は、たうとう、一本の木かげにぐつたりと坐りこんでしまひました。そして、



「もうわたしは、道をさがすのは止めにしやう、そしてどんな事があつても、この森のなかでくらすことにしよう。神さまがきつと、わたしを助けてくださるでせうから。」

と、かたく心にきめたのでありました。

### (三) 黄金の鍵

しばらく女の子が、さうしてちつと坐りこんでゐますと、一びきの白鳩がひらひらと木のうへから舞ひをりてきました。見ると鳩は、口に小さい黄金の鍵をくはへてゐます。そしてその鍵を女中の手のうへにおきましたので、女の子はふしぎにおもひながら、

「あや、鳩さん、この鍵をどうするの？」



と訊ねました。すると鳩は、

「むかふに大きな木が見えるでせう。あの木に錠がついてゐますからその黄金の鍵であけてごらんなさい。すると食べるものや飲むものがごつさり入つてゐますよ。あなたはお腹がすいたのでせう。さアはやく行つて、あけてごらんなさい。」

と、こたへます。女中はよろこんで、

「あら、さう。では行つてみるわ。」

といそいそ木のしたへ行つてみますと、なるほど、一つの錠がありました。女中がすぐ黄金の鍵をあけてみますと、不思議ではありませんせんか。なかから白いパンや牛乳をいばいもつた鉢がでてまゐりました。女中は大さうよろこんで、その御馳走をたべました。



その時もう、あたりはすこしづつ暗くなりかけてゐたので、女中は御馳走をすつかり食べてしまひますと、

「もう、わたし眠たくなつてきたわ。それに大へんくたびれてしまつたわ、でも、わたしのやすむ寝どころがあればいいけれど……」

と、かう悲しさに獨りごとを申しました。するとさつきの白鳩がまた一つの黄金の鍵をくちにはへて、ひらひらと舞ひをりてまゐりました。そしてその鍵を女の子にわたしながら申しました。

「この鍵で、いまの木をあけてごらんなさい。ほしいものが、きつとありますから。」

そこで女中がそのとほりにいたしますと、まつ白な美しい寢臺が一つでてきました。女中は大きうよろこんで、天の神さまにお祈りをさ



げると、そのまゝ寢臺のうへによこになつて、すやすや寝いつてしまひました。

あくる朝、女中がふつと目をさましますと、またもや昨日の白鳩が黄金の鍵をくちにはへて、をりてきました。そして今度は、

「もう一度、あの木を鍵であけてごらんなさい。今日は着ものがありますよ。」

と言ふのでした。女中がすぐ行つてあけてみますと、木のなかから一そろひの美しい着ものがでてまゐりました。まるで王女さまのさるやうな、黄金と寶石とで縫ひとりした、それはく立派な、うつくしい着ものでありました。



(三) 黄金の指輪

かわいさうな女の子は、かうして白鳩が毎日のやうに助けてくれましたから、さびしい森のなかでも、けつして暮すのには困らなかつたのです。いや、まづしい女中は、この森のなかではじめて、たのしい幸せな月日をおくることができるやうになりました。

するとある日のこと、いつもの白鳩がをりてきて、

「さて、むすめさん。わたしは、あなたにお願ひしたいことがあるのです。もし御親切があつたら、わたしのために骨を一つてくれませんか？」

と言ひました。



「え、なんでもいたしますわ、いつたい、どんな御用ですの？」  
女の子がかうたづねますと、鳩はつぎのやうに話しました。

「これからわたしが、あなたを野はらのなかの小屋へつれてまゐります。その小屋には、ひとりの婆さんがすんでゐますが、あなたが入つてゆくと、その婆さんはきつと——今日は——といつて挨拶をしますけれど、あなたはけつして返事をしてはいけませんよ。黙つて、うツちやツておけばいいのです。あなたは家のなかへ入つたら、右へまがりなさい。すると戸口がありますから、その戸をあけて中へはいるのです。むすめさん、できますか？」

鳩はさう言つて、ふと言葉をきりました。

「ええ、できますとも。」



と女の子がうなづいて見せると鳩は又つとけて、話しました。

「その室には一つの卓があつて、そのうへにいろいろの指輪がどつさり積んであるのです。うつくしいピカピカした寶石をはめた指輪もあるけれど、そんなのはみんな、ごんごんわきへはねのけるのです。そして飾りなしの黄金の指輪をさがしだしてください。きつと、そのなかにあるのですからね。そしてその指輪が手にはいつたら、大いそぎでわたしのそこへ持つてきてください。」

鳩はかう、たのんだのでありました。

「ようございますとも。ちやすぐ行きませう。」

と、女の子は鳩をせきたてるやうに、立ちあがるといそいで野原の小屋へやつてゆきました。そしてずんずん家のなかへ入つてゆきまし



た。

鳩のはなしたとほり、家のなかには一人のへんな婆さんがすわつてゐて、女の子のかほを見ますと、

「むすめさん、今日は。」

と言つて挨拶をしました。が、女の子はだまつて返事もしないで、ずんずん次の戸口へすゝんでゆきました。すると婆さんは、かけよつて来ながら、

「お前さん。どこへ行くのだね。——ここはわたしの家なんだよ。わたしの許しなしでは、誰もはいつてはならないのだよ。」

と叫ぶと、女の子の着ものをしつかりとつかんで、中へ入らすまいといはしました。



けれども女の子は、やつぱり一言も口をきかずに、婆さんの手をふりきるやうに拂ひのけると、すんすん室のなかへはいりました。

すると卓のうへに、山のやうに指輪がつんでありました。しばらく女の子の目がまぶしくて見えないくらゐ、それはピカピカと光つてゐたのです。女の子は指輪の山をざんざんかきわけて、はやく飾りのないのをさがし出さうといたしました。ところが、その指輪が、どうしても見つかりません。

そのとき人の氣配がしたので、女の子は、ふツと顔をあげました。するとさつきの婆さんが、鳥籠を手にさげながら、こつそり室をでてゆかうとするうしろ姿が、目にはいりました。

「おや、へんだわ。」



と思つた女の子は、婆さんのあとについていそいで室をでますと、すぐ鳥籠を婆さんの手からもぎとりました。そして中をあけて、のぞいて見ると、どうでせう。鳥かごのなかに一ぴきの鳥がゐて、くちばしに飾りなしの黄金の指輪をくはへてをりました。

#### (四) 魔法の力

女の子はほくほくとよろこんで、すぐ黄金の指輪をとりだすと、大いそぎで小屋のなかから走りだしました。

「あゝ。指輪が手にはいつてよかつた。あの鳩はきつと、くびをながくしながら待つてゐるにちがひない。はやく行つてわたしてやりませう。」



みちみちそんなことを思ひながら、女の子は足をはやめて、いつもの木のしたへやつてまわりました。ところが待つてゐるはずの白鳩のすがたは、そのとき、どうしたことか見えませんでした。女中は、「おや、どうしてとせう。」

とつぶやきながら、その木の幹に背なかをもたせかけて、鳩のくるのをまちうけながら、ちつと立ちつくしたのでありました。

女中は、そのとき、背なかをもたせかけた木の幹が、なんだか、だんだんあたゝかく柔かくなつてゆくやうな気がしました。そしてあをあをとした木の枝が、すこしづつ下に下がつてくるやうに思はれたのであります。

そのうちに一本の枝がふいに動いて、女の子のからだにまきついた



かと思ふと。ふしぎではありませんか。その枝はもう立派な人間の腕になつてをりました。

女中はびつくりして、顔をあげました。すると背なかをもたせかけた大きい木は、いつのまにやら、若いうつくしい人のすがたにかはつて、しつかりとちぶんの體をだいてゐたのです。

「ありがとうございます。あなたが魔法の力をやぶつてくれました。」

とその人は女の子に、かう心からお禮をのべました。

「僕はやつとあの婆さんの魔法の力からのがれることができました。あの婆さんはわるい魔法使ひなのです。そして僕を木のすがたにしてしまつたらうへ、毎日二時間だけは、白鳩のすがたにかはることを許したのでした。しかし黄金の指輪があの魔法つかひの手にあるうちは、





僕はどうしても、人間のすがたにかへることができなかつたのです。けれども、ありがたう。あなたが魔法の力をやぶつてくれました。」

この人は、ある國の王子なのでありました。そのとき王子とおなじやうに、木のすがたにかへられたうへ、御主人のちかくに立つてゐた王子の馬と下僕も、やつと魔法の力からゆるされて、もとの姿にかへりました。

そこで皆はつれだつて、いそいそと王子の國へむかつて旅だつたのであります。むろん、そのなかには、あの女の子のすがたもありました。そして王子は無事にお國へおかへりになると、女の子をたふといお妃になさいました。

なんでも博士



(一) いろは本と洋服

むかし、カニといふ貧しいお百姓がありました。カニは山から木を切ってきては、薪などをつくり、それを町へ賣りに行つて、そのお金で貧しいくらしをつとけてをりました。

ある日のこと、カニは、いつものやうに牛車に薪をつんで、町へもつてゆきました。

「薪はいりませんか、薪はいりませんか。」

どカニが、大きな聲でよびあるきますと、あるお医者さんの家で、それを聞きつけて呼びとめました。

カニは車の薪をみんな、お医者さんの家へ賣ることにしました。そ



して、お金を貰ひに入つてゆきますと、お医者さんは、テーブルにむかつて御飯をたべてをりました。テーブルの上には、いろいろの御馳走が、きれいなお血に、いつぱいのせてあります。それをみたカニは大へん羨しくなりました。

「あゝ、わたしも一度はあんな御馳走をたべて見たい。——お医者さんになつたら、こんな立派な家にすんで、おいしい御馳走をたくさん喰べられるのだ。羨しいなあ。」

お金を貰つてからも、カニはこんな事をかんがへなから、ぼんやり眺めてをりました。すると、カニはふといゝ事を考へつきました。自分もお医者になればこんな御馳走をたべられるのだ、といふことを！  
カニは先生にたづねました。



「先生。じつは、わたしもお医者さんになりたいのですが、わたしでもなれるでせうか。」

お医者さんは、びつくりして、カニの顔を見てみました。からかつてやるつもりで、

「あゝ、すぐなれるよ。」

と笑ひながら答へました。正直なカニはほんとだと思つて、

「ぢや、先生。どうすればなれるか、一つ方法を教へて下さい。」とたのみました。

「わけがないさ。まづ、鶏の繪のあるいろは本を買つてくるんだ。それから、お前の牛車を賣つて、醫者のきるやうな立派な洋服を買つておいで。それがすんだら、『なんでも博士』といふ看板を入口にかける



んだ。それきりだ。」

お医者さんは、にこにこしながら教へてやりました。

カニは大へんよろこんで歸りました。主婦さんのとめるのもきかずすぐに牛車を賣つて、いろは本を一冊、洋服を一着買つて來ました。みすばらしい百姓家の入口には、『なんでも博士』といふ、立派な看板が下げられました。

### (二) 器のなかの蟹

そのころ、町の近くに住んでゐた大金持が、ある晩たくさんのお金を盗まれました。お役所にうつたへて、いろいろ調べて貰つたのです。だれに盗まれたのか、すこしも判りません。そこで、だれか盗人



を見つけて、金をとり返してくる者には、たくさんのお金を御ほうびにやるといふ布令をだしました。

それをきくと、いろいろの人たちがやつて来て探しましたが、金のゆくゑはさつぱり判りません。

ところがある日、この金持は、『なんでも博士』といふ、大へん伶俐な、どんなことでも知つてゐるお医者さんがあることを聞きました。

金持はきれいな馬車にのつて『何でも博士』のところになつねてきました。

そして、

「先生、ごんなお禮でもいたしますから、どうぞ盗人とお金をお探しになつてください。」



と丁寧にかになんでも博士にたのみました。

「承知しました。だが、わたしの妻のグレンセルもいつしよに伺つてようございますか。」

カニ博士はすまして答へました。

「え、ようございますとも。」

と金持は大そうよろこんで、カニ博士夫婦を、馬車にのせてつれて歸りました。

お金持の家では、博士夫婦のために、おいしさうな御馳走がつくられました。カニ夫婦は、こんな立派な部屋で、こんな御馳走をいたゞくのは、生れてはじめてでした。

一人の召使が、うやうやしくお皿を運んで來ますと、カニはグレンセ



ルをそつとひちでつゝいて、

「あれが、はじめの男だよ。」

と、こんな金持のうちには、どれ程たくさんめしつかひの召使があるか氣をつけるやう、グレンセルにいつてきかせました。

ところが、この召使は盗人の仲間だつたものですから、

「おや、博士はわたしが盗人の一番はじめの男だつたことを知つてゐるのかしら？」

とびつくりしてしまひました。そつと、客間を出た召使は仲間をよびあつめていひました。

「おい、大へんだ。博士は、おれの顔を見て、あれがはじめの男だ、といつたよ。博士はこつちのやつたことをみんな知つてるぞ。」



ほかの召使たちも、これをきいてびつくりしました。そして、客間へゆくのを嫌がりましたが、御主人のいひつけですから仕方がありません。つぎの男が、おそろおそろ客間へ御馳走をはこんでゆきますとカニ博士はまた奥さんを肘でついで、

「これは二番目の男だよ。」

としらせてやりました。

この聲をきいた召使は、ふるひあがつてしまひました。三番目に御馳走をはこんできた召使も、

「これが三番目の男だよ。」

といふ聲をきくと、おなじやうにびつくりして、逃げるやうに客間を出ていつてしまひました。



四番目の召使が御馳走の皿を客間のテーブルにおいたとき、金持の主人は、カニ博士がどれほどの智慧をもつてゐるか、ためしてみやうと思つて、

「先生。失禮ですが、この蓋をした器の中にはなにがはいつてゐるの  
でせう？」

とたづねました。

この器の中には、ちやうど蟹の煮たのがはいつてゐたのでした。がもちろん、博士にわかるはずがありません。

博士もこの答へにはつまつてしまひました。

そして、おもはずひとりごとをいつてしまつたのです。

「いや、さすがのカニもつまつたね。」と。金持はしかし、そのひとり

ごとをきいて、すつかり感心してしまひました。

「いや、ほんとに、器のなかのものは蟹でございます。さすがは『なんでも博士』です。先生ならきつと、わたしの盗まれた金がどこにあるか御判りになるでせう。せひ、どうぞお探し下さい。」

### (三) 金のありば

金を盗んだ召使どもは、カニ博士をすつかり恐がつて、どうしたものだらう、とみんなで、いろいろ相談しました。が、べつにいゝ方法もありません。

「これは博士にこつそり、たのむ外あるまい。」

といふので、一人の召使がそつと客間に入つてきました。そして、



博士に目くばせをして、こつそり臺所に来てもらひました。

臺所にゐた召使たちは、

「實は、わたしどもが金を盗んだのです。」

とすつかり白状してしまひ、

「けれども、どうぞ御主人にはお告げにならないやうにして下さい。

お禮はいくらでもさしあげますから、どうぞゆるして下さい。」

と一生懸命にたのむのでありました。

「あゝ、よしよし、金をかくしたところさへ教へてくれれば、主人にはだまつてゐてやらう。」

カニ博士はかういつてやりましたので、召使どもは大へんよろこんで、みんな博士のまはりにあつまつてお禮をいひました。



一人の召使は博士を、金のかくしてあるところへ、つれてゆきました。博士は、その場所を覚えてしまふと、なにくはぬ顔をして客間へもどつてまゐりました。そして主人に、

「ちや、これから本をよく調べて、金のかくしてあるところを探すことにさせよう。」

と、いひました。そして、ポケットから、雞の繪のあるいろは本をとり出し、いかにもむづかしさうな顔をして読みはじめました。

このとき、五番目の召使が、ほんとうにカニ博士は、じぶんたちのしたことをみんな知つてゐるのかどうか、と怪しんで、こつそり客間にしのび込んで、博士の言葉をさいてゐたのでありました。

博士がやがて、



「汝そこにあれども、やがてあらはれいづべし。」  
といふ文句を読みあげますと、五番目の召使も、  
「さすがは『なんでも博士』だ。」

と、おもはずさげびながら、飛び出してしまひました。

カニ博士は、やがて立ちあがり、

「さあ、あなたのお金がかくされてゐるところへ、御案内しませう。」

とお金持を、金のかくしてある場所へつれてゆきました。しかし、

誰が盗んだかといふことは召使たちとの約束をまもつて、教へてやり  
ませんでした。

お金持は、なくなつたお金がみつかつたので、大層よろこびました  
そして、カニ博士には、そのお禮に、たくさんのお金をやりました。



カニは召使にも約束を守つてやつたので、召使からもたくさんのお  
禮を貰ひ一べんで大變なお金持になつてしまひました。

『なんでも博士』の評判は、それから大層よくなつて來ました。そし  
て遠くまで知れわたつたのであります。



一  
寸  
法  
師



(一) 一寸法師の智慧

ある晩、貧しい百姓が竈のほとりに坐つて、火を焚いてをりました。お上さんは傍に坐つて、糸を紡いでをります。

そのとき、百姓が、

「子供のないといふのは、悲しいことだ。私達は淋しくてたまらないのに、よその家は賑かですして楽しさうだ。羨やましいねえ。」

と、いひました。

「さうですとも。」

とお上さんも答へて、溜息をつきました。そして、



「たつた一人あつたらいいのだが、ごんな小さい子供だつて、ほんのこの拇指位な子供だつて、それで、もうたくさんなんですがね。」

と話し合ひました。

ところが、それから間もなくお上さんは一人の男の子を生み落しました。

しかし、その子は、手や足は立派に揃つてゐましたが、可愛想なことには拇指程しか高くありませんでした。

それでも、この貧しい百姓夫婦は大喜びでした。

「ちやうど、私達の願つてゐた位の子供ですよ。ですからこの子は可愛がつてやらなければなりません。」

とお上さんは云ひました。



それで、その子には拇指位しかないと言ふので指の男と云ふ名前を付けました。

いろいろなおいしい食物や、牛乳をたくさんにやつたのですが不思議なことに、子供はすこしも大きくならないで、産れたときのまゝでした。

けれども、目つきなどは、なかなか惻怛さうに見えました。

だんだん月日がすぎるにしたがつてその子はほんとうに活潑な惻怛な子になつて、その子のやることは何でもうまくゆきました。

ある日のことでありました。

百姓は森に木を伐りに出かけながら、

「だれかあとで車をひいてきてくれるといいが。」



と、ひとりごとを言つてゐますと、

「お父さん、私があとからちやうどいゝ時分に森まで車を持つてゆきますから、私にまかせて下さい。」

と、このちひさな指の男はいひました。

すると、百姓は笑つて、

「お前のやうな者にどうしてそんなことが出来やう、お前のその小さな體で馬の手綱を引くなんて、とても出来ないよ。」

と云ひました。

「お父さん、私は手綱など持ちませんよ。お母さんが馬をくゝり付けて呉れ、ば、私は馬の耳に入つて、どつちに行くんだか馬に云つてやるつもりです。」



と云ひました。

百姓は笑ひながら、答へました。

「それでは一度やつて見るかな。」

やがて時間が來ると、お上さんは馬をくくりつけて、小さな指の男を馬の耳のなかにいれてやりました。

馬の耳の中にはいつた一寸法師のやうな指の男は馬に森の中へ行く道を教へました。

「止め、進め、右へ、左へ。」

といふ指圖をきいて、馬は上手な人に引いて行かれるときのやうに森の中へ進んで行くのでありました。

ちやうど指の男が左へ左へと云つてゐるとき、そばを二人の男が通



りかゝりました。そして、びつくりしたやうに立ち止つてしまひました。

### (二) 旅のはじまり

二人がびつくりして立止るのも無理ではありません。

ひく人もないのに、馬が車を引いてやつて來るのですもの。そして、人間の聲だけ、どこからか聞えて來るのですもの。

「あい、あれは何だい。車は來るが人が見えないで、人の聲だけ聞えるぢやないか。」

ど一人の男がいひました。

「たゞ事ぢやないね。」